シネ・ロマンス
Cine-Romance



IX–X

失われた週末
The Lost Weekend



清水千代太

二人のドン・バーナム

ドン・バーナムは三十六歳の無名作家である。彼の告白によれば、カレッジ時代は天才であつた。カレッジで出している雜誌は、彼の小説なしでは出なかつた。十九歳の時が絶頂だつた。第二のヘミングウエイと目され、一篇はアトランチック・マンスリーが買い、リーダース・ダイジェストに轉載された。何の必要あつてカレッジにとどまろうぞ。若い天才は、母のおくり物のタイプライターをさげて、ニューヨークに出た。しかし、第一作はものにならず、第二作もだめであつた。公衆には向かないというのである。第三作、第四作に着手した時、誰かしら肩ごしに、のぞきこんで囁きはじめた。ヴアイオリンのE線のような、弱いが冴えた聲で。ドン・バーナム、それじやいけないよ。一二杯のんだらどうだ、ちやんと筋道を立てる爲にだよ。

そこでドンは飲んだ。天啓のごとくに、偉大な小説の構想が浮ぶ。美しく均齊のとれた、すばらしい悲劇調！ しかし、それが紙上に展べひろげられる前に、すべてはしんきろうのように消えうせる。絶望！ 絶望を醫するために一杯。そして、また一杯。作家ドン・バーナムがタイプライターの前に坐つて、原稿を書こうとすると、醉どれのドン・バーナムが囁く、第三街の質屋へタイプライターを持つてこうぜ、ナドルはいつでも貸すよ。ドンはこの醉どれ野郎と緣を切ろうと何度こころみたか知れぬ。ある時の絶望は、自殺をさえ考えた。事實、彼の三十歳の誕生日、ピストルを握り、彈丸をこめた。しかし、その時も醉どれドンに呼かれ、質屋へ行つた。ピストルはライ・ウイスキー三本になつたのだつた。

作家を斷念して、公吏なり、會社員なりになつたら、と思わないではなかつたが、そのような平靜なあきらめの境涯に入ることが、どうしてもドン・バーナムには出來なかつた。それは彼の兄ウイックが彼を護つてくれているからでもあつた。ウイックのアパートに同居して、部屋代も食費も兄がもち、一週に煙草錢が五十センツ、時折の音樂會か劇場の切符、それも弟思いのウイックが出した。ドンは心苦しく、何とかしたいと思いながら、ずるずるに兄の溫情のままに寄食し續けているドンであつた。

木曜日

こんどの週末旅行もウイックの企畫であつた。木曜日の午后三時十五分の列車で立ち、田舎で金、土、日、月と四日間の長い週末を過し、このところ十日間ほど酒を絶つているドンに、草と木と冷たい井戸水と、あまいサイダーとバタミルクで、健康をとり戻させようという兄の計らいである。しかし、十日もウイスキーに遠ざかつているドンのどは、「渇い」ている。サイダー、バタミルク、井戸水、そんな面白くもないもので、渇きがとまるもんか。ドンはスーツケースに着がえの肌着をつめながら、どうして兄の眼をかすめて、一瓶のウイスキーをもつて行こうかと、イライラしている。瓶の首を細ひもで結えた大切なしろ物は、寢室の窓の外にぶら下つているのだ。それをスーツケースに忍ばせるすきがないのだ。

そこにヘレンが訪ねて來る。ドンの週末のために新刊書二册、煙草、チユウインガムをたずさえて。「かがんで！」小さい、背の低い彼女は、キッスする時にいつもドンに、こう言うのがくせである。「じや行つてらつしやい。私も急がなきや、音樂會にもう十分おくれてるのよ。カーネギー・ホールの切符が二枚あるの」「誰と行く？」「私ひとり」そこでドンは三時十五分出發の予定を、六時三十分の列車に延ばし、音樂會へ行くこと、行くのはウイックと提議する。二人とも反對したが、時はすでに三時五分前で汽車に間に合いそうもないの

ハリウッド製作情況

☆MGM社

▽復員後カスリン・ヘプバーンと「暗流」に主演したロバート・テイラーは、愛妻バーバラ・スタンウイックと欧洲を旅行して最近帰つて來たが、カーティス・ベルンハルトの監督する「高い壁」"The High Wall"に主演する事となり、「湖中の女」で認められた新進オードレイ・トッター、ハーバート・マーシャルを対手として、既に撮影が開始された。

▽クラーク・ゲイブルの対手役として「宣傳屋」"The Hucksters"に主演した英国のスター、デボラア・カーは、ウォルター・ピジョン、アンジェラ・ランズベリーと共にヴィクター・サヴィルの監督する「冬來りなば」に主演中であるが彼女は夫君トニー・バートレイと四五年十一月に結婚したが、今年の十二月頃赤ちやんが生れる事になつたと発表した。

▽イングリッド・バーグマンが製作者ウォルター・ウエインジャー及び監督ヴィクター・フレミングと設立した独立プロは「ジャン・ダーク」"Joan of Lorraine"を今年の夏製作するが、この映画の配給権はMGMが獲得した。

☆パラマウント社

▽フランク・キャプラ、ウィリアム・ワイラー、ジョージ・スティーヴンスの三大監督と製作者のロバート・ブリスキンとで設立し、既にキャプラの「素晴らしい人生」をRKOから発売したリバティー映画社は、今度パラマウントに買收され、四人のメンバーはパ社の傘下に加わることになつた。

▽規模の大きい西部劇を各社とも毎年数本づつ作つているが、パラマウントは秘蔵の新進スター、アラン・ラッド主演で、テクニカラーの「叫くスミス」"Whispering Smith"に着手した。レスリー・フエントンが監督し、ロバート・プレストン、ブレンダ・マーシャル、ドナルド・クリスプ等が共演する大西部劇である。

▽エルマー・ライス原作の紐育の当り狂言「夢の娘」"Dream Girl"の映画化が、ミッチェル・ライゼンの監督で開始された。ベティー・ハットンの主演。マクドナルド・ケイリー、パトリック・ノウルス、ヴァージニア・ウッド等の主演する大作である。

☆二十世紀フォックス社

▽近く我国に紹介される「アンナとシャム王」でアメリカ映画にデビユした英国のスター、レックス・ハリスンは、その後ジョーゼフ・マンキーウィッチ監督「幽靈とミュア夫人」に主演し、今はジョン・M・スタール監督の「ハアローのフォックス一家」"The Foxes of Harrow"に主演中である。対手は最近「三十四丁目の奇蹟」にジョン・ペインと主演したモーリン・オハラで、新進ヴァネッサ・ブラウンも共演する。これはフランク・ヤービー原作のベスト・セーラで、ハリスンはニウ・オーリーンズの博奕打、スティーヴン・フォックスに扮して居る。これが終ると、彼はジョーゼフ・マンキーウィッチの監督する英国の文豪ジョン・ガルスウォージー原作の「逃走」"Escape"を、故国英国へ帰つて作る予定である。

▽タイロン・パワーは「剃刀の刄」に続いてヘンリー・キングの監督する大作「キャステイルから來た大尉」"Captain from Castile"に主演した後、「剃刀の刄」と同じくエドマンド・グールディングの監督する「夢魔の横丁」"Nightmare Alley"に着手した。この映画の対手役は「ブルックリン横丁」のジョーン・ブロンデルである。

▽グレゴリー・ペックは近く「青春の宿」「ブルックリン横丁」のドロシー・マッガイアーと共に、フォックス社本年度第一の大作「紳士協約」"Gentleman's Agreement"に主演する。監督は「ブルックリン横丁」のエリア・カザンで、ダーリル・ザナック自身が製作を擔当する。原作はローラ・ホブスンの小説で、本年度随一のベスト・セラーである。

▽ジョーン・クロフォードはヘンリー・フオンダ、ダナ・アンドルウスと共演してエリザベス・ジエインウエイ原作のベスト・セラー「デイジイ・ケンヨン」"Daisy Kenyon"に特別出演をする契約をした。

▽本年度のアカデミー女優演技賞を獲得したオリヴィア・デハヴィランドは、アナトール・リトヴァックが製作、監督する「蛇の穴」"The Snake Pit"に主演する契約をした。

☆リパブリック社

▽「凱旋門」を完成したルイズ・マイルストーンは、チャールス・K・フェルドマン・グループ・プロダクションの第一回作品「赤い小馬」の監督を開始した。これはジョン・スタインベックの原作で、テクニカラーで撮影され、マーナ・ローイ、ロバート・ミッチャム、ルイズ・カルハーン等が主演している。

☆RKOラジオ社

▽「世界の母」のチーム、即ち監督ダドリー・ニコルス、スターのロザリンド・ラッセルは、ユージーン・オニール原作の「喪服の似合ふエレクトラ」"Mourning Becomes Electra"を製作中である。英国の俳優マイケル・レッドグレーヴ、「エイブ・リンカン」のレイモンド・マッセイが共演している。

▽「エイブ・リンカン」「青春の宿」のジョン・クロムウェルは、マール・オベロン、ダナ・アンドルウス、エセル・バリモアを主役とする「愛の想出」"Memory of Love"を監督している。盲目の作曲家のロマンスである。

▽サミユエル・ゴールドウィン映画「司教の妻」"The Bishop's Wife"が、ケイリー・グラント、ロレッタ・ヤング、デイヴィッド・ナイヴン等の主演、ヘンリー・コスターの監督で進行中である。

▽ウイリアム・ウェルマン監督、ジエームズ・スチュアート、ジェーン・ワイマン主演の「魔法の町」"Magic Town"と、ジョン・フオード監督、ヘンリー・フオンダ、ドロレス・デル・リオ主演の「逃亡者」"The Fugitive"の二本が撮影完了、編輯中である。

☆ユニヴァーサル・インタナショナル社

▽フリッツ・ランクは自ら製作、監督する「扉の蔭の秘密」"Secret Beyond the Door"を完成した。ジョーン・ベネットとマイケル・レッドグレイヴの主演するスリラーである。

▽ダグラス・フェアバンクス・ジュニアは、独立製作者兼スターとしてUI社に入社し、第一回作品「流浪の身」"The Exile"に主演中である。マックス・オーファルスが監督する劍劇で、マリア・モンテスが共演している。

☆ウオーナー・ブラザース社

▽RKOでケイリー・グラントと「独身男と女学生」に出演したシャーリー・テムプルは、今度はウォーナーで、「嵐の青春」のロナルド・リーガンと共に「メエリー・ヘイガン」"Mary Hagan"に主演して居る。監督はピーター・ゴッドフリー。

▽「鉄腕ジム」のチーム、即ち監督のラオール・ウォルシュと、スターのエロール・フリンが新作に着手した。「シルヴァー・リヴァー」"Silver River"と題されるネヴァダの銀山を背景とした活劇で、「嵐の青春」のアン・シェリダンと、性格俳優トマス・ミッチエルが共演している。

▽「カサブランカ」の監督マイケル・カーテイスは、独立プロを創立して作品をウォーナーから発売することに成り、第一回作品「疑はれざる人々」"Unsuspected"はジョーン・コールフィールド、オードリイ・トッター、クロード・レインズの主演で既に完成し、第二回作品「高いハ音のロマンス」"Romance in High C"が早くも開始された。主役は「鉄腕ジム」で紹介されたジャック・カースン、「アメリカ交響楽」のオスカー・レヴァント、新進ジャニス・ペイジ等である。

シネ・ロマンス　第9-10号目次

編集構成　岡俊雄



オードレイ・コオン
（パラマウント）

ころが或日のこと、第二章だよ、或日のこと。トレドから彼女の兩親が出てきた。ひとり娘が愛してる若い男に會つて、樣子も見たい、色々と訊きたい事もあるというわけで、ホテル・マンハッタンで午后一時に中食しながら會見——と約束した。ドンは少し早目に着いて、ロビーで待つていると、背中あわせに座つている老夫婦、その話を聞えてくるままに聞くと、まさしくヘレンの父母である。物がたい、律儀な地方紳士と妻である。コーネル大學に入つてて卒業はしなかつた、三十三で無職、しかも今まで一度も就職もせず、小説を書くというが、何という小説を書いたのかな、——

老夫婦の話を耳にしたドンは、顏を合せる勇氣が途端に失せた。ヘレンの姿を見るとドンは隱れ走つて電話室に忍び込み、ヘレンを帳場の電話に呼出して、おくれるから先に食事してくれ、あとで伺うから、と斷つた。それからアパートへ歸つて飮んだことは言うまでもない。

夕やみ迫るころ、ウイックが歸つて來た。ドンが事の次第を語る間もなく、ヘレンが心配して訪ねて來る。ウイックは呼鈴の音を聞くと、反射的にドンを寢臺にかくまい、瓶を今までドンが倒れていた寢椅子の下に蹴こんで、ヘレンを迎えた。とつさの思いつきで、ドンはフィラデルフィヤへ今朝出



イーン映畫界にあつたひと、この映畫の前に「倍額支拂保險」「大と小」等があり、近作に「皇帝圓舞曲」がある。撮影監督はハリウッド最古參のキャメラマンの一人ジョン・F・サイツ、音樂はミクロス・ローザが書いている。

主役ドン・バーナムはトーキー初期ごろから二枚目俳優で「呪の家」に出ていた英國から來たレイ・ミランド、ヘレンは返り咲きのジェーン・ワイマン、近くは「一年仔」「シャイエン」などにも出演している。助演は 兄のウイックにフイリップ・テリーが、ナットに「最後の地獄船」のハワード・ダ・シルヴア、グローリアにドリス・ダウリング、看護手ビムにフランク・フエイリンがそれぞれ扮している。

アカデミー受賞作品であるからというだけでなく、脚本としても實によく書けているし、演出の神經がこまかく行きとどいていることは、推賞に値するものがある。撮影も演出意圖とマッチしているし、音樂ならびに音響効果も、映畫のアンサンブルに効果的に、有機的に、寄與している。その意味で作品賞を得たことも、もつともだと肯ずかれる。ミランドの演技は、確りしてもいるし、力演でもあり、映畫演技としての自然な調子が通つているのがいい。しかし右にあげた助演者に與えた演技指導は、特にすぐれたもので、演出者ウイルダーの苦心のほどが、はつきり解ると思う。

で、ウイックは弟の愛人のお供をし、ドンは晝寢をすることになる。ところがウイックは煙草の燃えさしをほおつたのが窓わくに乘つたので、窓の外にブラ下つている瓶を發見する。ウイックは遠慮なく、そのウイスキーを浴室で流してしまい、ヘレンと共にカーネギー・ホールえおもむく。

ひとりアパートに殘つたドンは、眼の前でウイスキーを流されたので、渇きはつのるばかり。かねて瓶を隱しつけている隱し場處を、氣ちがいのように探して見たが、ない。ドンの額には汗がにじみ出る。掃除婦が來て、掃除代を請求する。その代金のありかを彼女から聞いて、ドンは十ドル札を握り、彼女には兄が忘れたのだろう、ないよと嘘をつく。ドンは脫兎のごとく、酒屋へ行き、もつとも安い、強い二ドル十五センツのライ・ウイスキーを二瓶買い、袋に入れて抱いて、ナットの酒場に立寄る。六時十五分前になつたら知らせてくれ、週末旅行に出かけるんだ、この二本の爆彈を、どんな風に兄貴をごまかして持つて行くかが問題だよ。一杯たのむ。一杯のストレートのライ、それをば彼はグッと口の中え、のどの中え、ほおり込むようにして飲む。六時十分すぎですぜとナットに言われ、あわててドンは酒場をとび出す。アパートの階段を上りかけると、兄とヘレンが下りて來る足音だ。本能的に、ドンは忍び足で裏口え拔け、あみ戸のかげに身をひそめる。ウイックは怒つている、ヘレンがドンを待とうと言うのをしりぞけ、一人で週末旅行に行く。ヘレン、あんなアル中とは別れてしまうがいい。きみも氣ちがいだ。私、氣ちがいかも知れないわ、さようなら。

ドンはどこで飲んでるのかしら、うれわしげにヘレンは表にたたずんでいる。その後姿を見やつて、こつそりドンは階段を上つて歸る。部屋の戸には鍵をかけ、更にくさりを通し、ようやく安心したドンは、テ[illegible]の上にあがつて、瓶の一本をシャンデリアに隱し、安樂椅子にドッカと落ちこむようにかけ、ネクタイをゆるめ、凱旋將軍の微笑をうかべ、波々とつがれたグラスの液體を見やる。ウイスキーはゆらゆらとゆらいでいる。

金曜日

愛するドンへ——私はお歸宅を待つていました。どうぞ氣をつけて下さい。少しでも眠ること、そして食べること。私を呼んで頂戴、私を呼んで頂戴、私を呼んで頂戴。　ヘレン

戸の外側に、この走り書きの手紙がピンでとめてある。金曜日の朝である。ドンは手にとろうともせず、顔を近ずけて讀むなり階段をおりる。ナットの酒場え午前中からお出ましだ。豹皮のオーヴアを着た御婦人が、昨晩たずねて見えましたぜ。何と言つた？　もう二週間あんたの顔を見ないと言つときましたよ。有難い、助かつたよ。そこへ、酒場女のグローリアが來る。ドンは別に氣もないのに、四十四丁目の劇場へ、「ハムレット」を見に行こうと約束する。かねてドンに岡ぼれしているグローリアは大喜びだ。八時半ね。これから美容院へ行つておめかしするわ。待つてるわよ。

ねえ、バーナムさん、俺アあんたが嫌いだよ。ほかの酒場で飲んで下さいよ。急にどうしたんだ？　グローリアをさ、だますのは殺生ですぜ、破ると決つてる約束なんかしてさ。一杯くれ。それにあの御婦人だ。ゆうべもよ、眼がぬれててさ、お化粧もくずれてましたぜ。もう一杯くれ。上品な、立派な御婦人がさ、あんたみてえな飲んだくれと、一體全體、何の因果でかかり合いになつたのかね。ナット、聞いてくれ、俺の小說を、「瓶」という題だがね、私小說というやつだ。第一章は、三年前、雨の午后、メトロポリタン・オペラ・ハウスの「椿姬」のマチネーに始まるんだ。どうした間違いか、携帶品預り札の渡し違いて、受取つてみるとドンは豹皮の女オーヴアと傘、ヘレンは男物のレインコートと山高帽を持つて當惑したのであつた。ヘレンは姓をセン・ジエイムスといい、雜誌「タイム」の編輯部員、オハイオ州トレドの出身であつた。その歸るさ、ヘレンの友人主催のカクテル・パーテイにお供したのが、馴れそめで、戀こそはふかしぎな力があるとはいえ、ドンは一週間、二週間、六週間というもの、アルコールの香もかがず、もつぱらトマト・ジユースを飲み、愛を語つたのであつた。

ナット、一杯くれ、なみなみと注げ。と



解說

パラマウント一九四五年作品。一九四五年度アカデミー作品賞、監督賞、脚本賞、主演男優賞を得た。原作はチヤールス・R・ジヤクソンの小說、それを素材として、この映畫の製作者チヤールス・ブラケットと監督のビリー・ウイルダーが協力して脚本を書いた。この脚色チームの作には「靑髯八人目の妻」がある。監督ウイルダーはウ



下から女の子が歌いながら上つて來る。狹い階段をスレ違うとき、ドンは足をふみはずして、轉がり落ちる。下まで落ちて、あお向けにドンはノビてしまつた。

日曜日から月曜日

眼をさますと、ドンはベッドに寢ている。縞のバス・ローブを着ている。ベッドが並んでいる。逞ましい看護手が敎えてくれる。ここはアル中患者收容所で、今日は日曜日であるということ、退院許可證なしには出られぬこと、ドンはアル中としては初年級であること、二年級になると幻覺が起り小動物が見えるようになること、その例として向う側の隅の患者だ、彼はカブト蟲幻覺症であること。藥を飮まされるとドンは眠つた。眼がさめると夜である。カブト蟲幻覺症の患者が悲鳴をあげている。悲鳴をあげてシーツを叩き、足でける。發作が起つたのだ。醫師と看護手と守衞が現れ患者を抑える。隔離病室へ移すらしい。醫師が脫ぎすてた長い上着がドンの眼につく。すきを見て、その上着を羽おつて、騷ぎの最中を利用して、ドンは脫出した。

表はすでに曉闇である。月曜日の朝である。ドンは急いだ。高架線に乘つた。とある酒屋の店が開くのを待つてドンは、ライ・ウイスキー一瓶を强奪して、アパートに歸つた。飮んだ。

電話のベルが鳴つている。醉いつぶれていたドンは眼を開ける。鼠の鳴聲！　安樂椅子に腰かけたまま眠つていたドンは、宵やみの薄あかりに、寢室へのドアのそばの壁に鼠がいるのを見た。窓には蝙蝠がいる。そいつが部屋を飛びまわる。ドンの頭をかすめて飛ぶ。と、壁の鼠に飛びつく。鋭い爪で鼠をつかむ。鼠は死んだが、血が血がタラタラと流れる。ドンは悲鳴をあげ、兩手で眼を掩う。

アパートの主婦がドンの悲鳴を聞きつけ、ヘレンに電話で知らせたので、彼女は駈けつける。門番の合鍵でドアを開け、ヘレンが入るとドンは入口のそばにうづくまつている。助け起すと、ドンは壁だ、壁の穴だと言う。穴なんか有るもんですか、どうしたのよ、とヘレンに言われてドンは壁を手でなでてみる。はじめて眼がさめた心地だ。ついに、僕も二年生か、小動物が見え出した、ヘヘヘヘ。

火曜日

火曜日の朝。雨が降つている。ヘレンは居間の寢椅子に寢た。寢室のドアがあいた氣配に彼女は眼をさますと、ドンだ。ヘレンの豹皮の外套を持ち、彼は部屋をとび出した。ヘレンが追つかけると、質屋からドンが出て來る。質札を頂だいといくら言つてもドンは渡さない。ヘレンは質屋に入つて訊ねると、オーヴアは前に入質してあつたピストルと引換えただけだという返事。まだヘレンは靑くなつてアパートに戻る。ドンは兄へ遺書を書いたのだ。葬式に花はいらぬ、氣のきいたジョークを二言、三言ほしい、とドンらしい遺言だ。彼女には死んで了つたドンよりも、醉つているドンの方がよかつた。彼女は酒を勸めた。ヘレンは賴んだ。才能も野心もアルコールの湖におぼれて死んでしまつた、生きてれば、きみと兄貴に迷惑をかけるだけだ。いいえ、貴方の才能は死んでやしないわ。そこに、ナットがタイプライターを屆けに來た。グローリアから預つていたのだ。タイプライターが來た。作家ドン・バーナムにはまだ望があるしだ。ヘレンはコーヒーを用意する。ドンはウイスキーのグラスをとつたが、その中に煙草を捨てた。ヘレンはホッとした。ねえこの週末のことを書いたら？　そうだ、書いていけないはずはない。

木曜日の午后、週末旅行の仕度をしているドン・バーナムの心は、窓の外に下げた瓶にあつた。……

かけたんだと思う、新聞社に口があるような話をしていたようだから、とウイックは弟をかばつた。ドンが就職すれば結婚できる、ヘレンは喜んで歸りかける。ドア越しに聞いていたドンは、そのままヘレンを歸らせることは出來なかつた。居間に出てくると、ヘンレに一切の眞實をブチまけた。

「ウイックは、僕の兄と生れた不運な男だ。しかしヘレン、きみはこの大都會の人ごみの中で、行きずりに會つたひとだと思つてくれ。このまま別れて行つて了うんだ。急いで、あとをふり返らずに」「ドン、そんなにお思いなら私を見損つてるのよ。あなたがウイスキーを愛してるのなら、私は私だけを愛させてみせるわ。私戰うわ、勝つまで戰うわ。かがんで頂戴」ドンはことさらに、グラスの殘りのウイスキーをガブリと飲んだ。ヘレンは人さし指と中指でドンの唇をなでるようにふいて、彼の頭をひきよせてキッスした。

これが三年前のことさ。ヘレンは剃刀の刄をつかんでるみたいなもんだと知つている、しかも手を離さない。三年間も。それで、どうなるんですかい？ 知らん、そんな先までは。教えてあげようかね、あんたがね、エンパイア・ステイト・ビルのてつぺんまで上つて、まつすぐに、こんな風にさ——とナットは手をおろして指をならす。でなきゃ、地下鐵に下りて行つて、さッと來る電車の下じきさ——と指を鳴らしながら、手で横一文字を描く。馬鹿を言うな、ナット。俺は書くぞ。歸つてすぐタイプライターに向うんだ。

瓶　小説　ドン・バーナム作　ヘレンにささぐ　わが愛のすべてとともに

これだけ打つと、煙草を出し、マッチをする。タイプ用紙を見つめる。額を手でこする。そして瓶を探す。本棚、衣裳タンス何もかもおつぽり出す。もう一本はどこだ？ どこにおいたんだ？ 思い出せない。

ときに使つたマッチのレッテル。——ハリイとジョーの酒場　良い酒のみせ　西五十二丁目十三番——とある。

ハリーとジョーの酒場で、ドンはジン・ヴェルモットを一杯飲んだ。勘定書を貰うと、金が足りない。そこでもう一杯註文する。そしてドンは隣席の女のハンド・バッグを引きよせ、巧みに服の下に忍ばせて抱く。化粧室に入つて手を洗うふりをして十ドル札を一枚だけ失敬し、何くわぬ顔で戻ると、バッグ紛失を氣付いて、女は立つている。感付かれてはやむを得ない、ドンはあつさりバッグと十ドルを差出す。勘定も出直して來て拂うよ。その面を二度とここに見せるな、マイク、野郎をつまみ出せ！

アパートに戻ると、ドンは寢椅子にひつくり返る。見ると、頭の上のシャンデリアに入れた瓶の影が、電燈の光で天井にうつつている。ハヽハ、ハヽハ！ドンはヒステリックに笑いながら、コーヒー・テーブルの上に小椅子を乘せ、シャンデリアから瓶をとり出す。下りるなり、コルクをグイと引きぬいて、グッグッグッとあおつたのである。

土曜日

土曜日の朝、ドンは電話のベルで眼がさめる。ベルは神經的に、しつつこく鳴る。ヘレンが呼んでいるのだ。ドンは電話器のそばまで來て、小椅子につかまり、じつと電話器を見つめて、獨りごとを言う。ヘレン、やめてくれ！ 僕は大丈夫だ。きみと話が出來ないだけだ。頼む、やめてくれ！

ドンは空の瓶を二本、逆さに持つてグラスの上にかざす。二滴、三滴、したたり落ちたのを吸い込んで、手をポケットに突込み、出して見ると銅貨が二枚だ。ドンはタイプライターから紙を抜きとつて捨て、ふたをして手に持つ。よろよろとよろめいて壁によつたドンは、だめだ、とても質屋ま

りごと。途端に、やんでいた電話のベルがまた鳴り出す。電話に追立てられ、ドンは入口のドアを開け、二本の牛乳瓶をまたぐ。昨日のヘレンの手紙はまだピンでとめたままになつている。

タイプライターを抱いたドンが、やつとの思いでたどり來たつた質屋は締つている。前にいた女にドンは訊いた。今日は日曜かね？ 土曜だよ、なぜさ？ 締つてる、他の店は皆あいてるのに。誰かが死んだんだろよ。

しかし第三街の質屋は、第二のも、第三のも、第四のも、閉ざされている。歩いて歩いて第三街を東七十五丁目まで歩いたが、第五の質屋も閉店。第三街東九十丁目、ドンはタイプライターを兩手に抱いてよろめいて行く。第六の質屋の前にユダヤ人が二人いる。なぜ締めてるのかね？ 今日はヨム・キッパアですよ、ユダヤの祭日さ。アイルランド人の質屋はどうしてる？ 締めてるよ、協定でね。ヨム・キッパアには向うも締める、われわれも聖パトリック祭には開けませんよ。そいつはいいジョークだ。とつてもおかしいや！ というドンの聲は涙聲、泣かんばかりである。

あえぎながらドンがナットの酒場にたどり着いて、倒れるようにバアによりかかつたとき、酒場の時計は三時五十四分！ ナット、一杯くれ。死にそうだ。こんど拂うから一杯くれ。質賣はしないよ、御承知の通り。じや、惠んでくれ、お願いだ、一杯くれ、ナット。一杯だよ！

ナットの酒場を出て、眼に入つたインヂアンの木像。ドンはそのアパートに入る。二階まで、階段をどう上つたか、彼はグローリアのドアの呼鈴を押す。バーナムさん謝りに來たの？ 澤山だわ。うそ吐き！おかげさんで美容院へ行つたりして大散財させられたわ。一體、何の御用で、ドン・バーナムさま、今日はお出ましで御座います



馬鹿におしでないよ。出てつて頂戴。

ドンはグローリアに顔をよせ、キッスした。グローリアは手をドンの後首にまわす。あたし夜なかまで待つてたのよ、初めてのランデヴーみたいに。そして夜明まで泣いていたのよ。いくら要るの？ 十ドルでも五ドルでも。グローリアは札を渡してあんた病氣じやないかしら、熱があるみたいよ。大丈夫だ。あんた、あたしを少しは好きなのね、ね？ モチだよ、グローリア、モチだ。

かし、作中の人物の氣もちに、すぐはいって行ける。だれでも目につくような日常茶飯事のなかから人間の氣もちをよくあらわしているような描寫のたねをさがしだす。ルネ・クレエルの「巴里祭」フェデエルの「ミモザ館」などはそういう意味で傑作である。

　フェデエルの「女だけの都」は一見、歴史的な事件をあつかった、おおがかりな作品のようであるが、作者が力點をおいているのは大事件に出あってそれに反應する人間の心理であって、どのようなフランス映畫でも、第一流の作品であるかぎりは、こういう人間心理の解剖を主としないものはないといってもいいくらいである。「巴里祭」のような情緒的な喜劇にもかならず上っつらでない心理の裏づけがある事は一寸した行動の意味深さをみても、わかると思う。

　フランス映畫が、一體に陽氣でなく、また陽氣であっても、その底に哀愁が感じられ、皮肉や諷刺の色合がこいのは、いまもいいたような人間の眞實を見る目がするどいからなのであって、アメリカ映畫のような底ぬけな陽氣さが見あたらないのは、新興の氣勢から發する樂天主義がなく、ふるいヨオロッパの文化的な「おり」のせいでもあらうが、それはそれで、「たち」こそちがえ、日本人の「あきらめ」に、ひびくものがあり、わりあいにぼくたちには、そういうフランス映畫のメランコリイが理解されやすいのである。しかし日本人には、彼等のつよい懷疑がなく、人間を見つめる根氣がない。フランス映畫から、ぼくたちは、その表面にでていない筋金入りの精神を學ばなくてはならない

　まえにもちょっとひきあいにだした「映畫＝リズム」の説があるように、フランス映畫は、リズミックな表現においては、すぐれた効果をあげている場合がすくなくない。クレエルの「巴里祭」や「自由と我等に」などを見たものは、この點に關して、すぐ合點が行くことであろう。アメリカ映畫のような目まぐるしいアクションはないかも知れないが、おちついたヘアモニイのあるリズミックな畫面の處理は、フランス映畫のまた一特色たるをうしなわない。音樂の方面を、世界的に有名なオネッガアをはじめ、あたらしい流派のひとたちが受けもっている事實も、特筆の價値があらうとおもう。

　セットのつくりかたなどにも、きたないものをうつくしくとったり、安あがりで氣のきいた出來ばえも見せる特殊の才能がみとめられる。きたない裏街の貧乏なひとたち、そんなはえない人間たちでも、スクリインのうえでは、ひとの心をとらえてはなさない人物になりうること、そんなところに、フランスの映畫が、藝術品としてすぐれている機微の問題がありそうに見えてならない。

その製作スタッフ

　專門的な才能にめぐまれながら單に專門的な技術者ではなく、藝術一般に理解をもち、ことなった種類の藝術にも一流の手腕を見せるところ、これは、フランスの藝術界にはよく見うけられる現象であるが、映畫界とてもまた同様である。クレエルは、小説も書き、エッセエも書く。アベル・ガンスにも論文がある。一方、劇作家マルセル・パニョルは、映畫のシナリオ作家、監督者としても、第一流である。パニョルの戰爭中の作品「井戸堀の娘」は、アメリカで賞讚のまとになっている。おなじく一流の劇作家マルセル・アシャルは、映畫の脚本を書くばかりか、映畫批評家としても、專門家以上の腕前を見せている。シナリオ作家ジャック・プレヴェルは、最説小説を書いて、戰後の文壇のみとめるところとなっている。このように、藝術間の交流は、フランスでは、ごく普通のこととなっているが、ほかの國ではこんなことはめずらしい。映畫が、なんら背のびをしないで、ほかの藝術なみになっていることは、一流の文藝雜誌に、堂堂たる映畫批評がのっている事實をみても、うなずけることである。こういうなごやかな文化的雰圍氣は、日本でもつくりたいものである。

　なんといっても、これは、インテリジェンスの問題である。一藝にすぐれたものは、他の藝術をも理解するはずであるのに、日本にはこれがないということは、まだ日本が一流の文化國でない證據かも知れない。しかし、アメリカやイギリスとても、こういう例は割合に少ないのであるから、そんな事は、まだぼくたちにとっては、てんでごまめの齒ぎしりである。

　俳優にいたっては、こうした交流の問題は、いうだけやぼであるといいたいくらいで、演劇と映畫が共通の俳優をもつということはフランスでは一番普通なことである。映畫專門の俳優が、映畫にとって大切なことは、いうまでもないが、うっかりすると、それは個性だけの俳優になりやすい。複雜な心理を表現する演技は、往往にして、舞臺の俳優のたすけをかりなければならないことがあるが、それはながい年月にわたる演技の修練のくりかえしが、ものをいうからである。その場合、舞臺の俳優が、映畫の演技の性質をのみこんでいれば、鬼に金棒である。フランスの舞臺俳優は——ことにわかい連中は——この點、實にいい感覺をもっていて、舞臺の俳優にありがちなオウヴァ・アクティングのうれいなどはほとんどない。最近の傑作といわれている「樂園の子供たち」（マルセル・キャルネ監督）の主演者ジャン・ルイ・バロオは、さきごろ國立劇場コメディ・フランセエズを脱退した新進氣鋭の青年俳優である。ジィドの譯した「ハムレット」の主役を演じて好評を博したという通信も日本の新聞にのっていた。おなじ映畫のアルレッティなどは、年増女のセックス・アピイルをこんなにだした女優はないと、アメリカでも取りさたされているくらいだが、これもふるくからの舞臺女優である。むしろフランスでは、生えぬきの映畫俳優などはいないといってもよく、最近では、アメリカでも、しろうとから一躍スタアになるひとが、わりにすくないところをみると、トオキイになってからは、俳優が映畫と舞臺に共通なのは、むしろ自然なこととさえおもわれる。

文學との交渉

フランスは、十九世紀の「小説の時代」から、小説のもっともさかえた國であるが、現代フランスの有名な小説で、映畫化されるものがわりにすくないということは注目しなければならない現象である。アメリカのように、いわゆるベスト・セラアズが、かたっぱしから映畫化されるということはない。ことに、一流の監督者は、そういうことをわりにしない。これは、一面では、小説と映畫の差をよく知っているからでもあるし、現在のフランスの小説が、アメリカのベスト・セラアズのようには映畫化されにくいという事情があるからでもある。いまのフランスの小説は、心理小説や哲學的小説がおおく、筋や事件があまりないので、いわゆる「映畫的」ではない。小説と映畫が、アメリカにおけるそれらのように、密接に關係してはいないのである。

　むしろ、フランスの映畫作家はある意味では三文小説を映畫化したがるという結果さえ見せている。映畫の効果をあげやすい題材として、それらがえらばれることはいうまでもないが、一方では、この二つの藝術ジャンルを、それぞれの特質において、尊重している態度からきた現象ともいえる。それゆえ、もし映畫人が自分で小説を書けば、おそらく映畫化できないようなものを書くことはうけあいである。フランス映畫は、一面文學的な要素が非常においけれども、文學的要素と文藝作品とは、また別の問題なのである。

フランス映畫のはなし

飯島正



その歴史

フランスは、映畫國として、一番ふるい國である。——というのは、いまぼくたちの見るような形式の映畫を、はじめてつくり、はじめて公開したのは、フランスであったからだ。發明者は、リュミエエル兄弟。公開されたのは、一八九五年のことであった。

初期のフランス映畫は、世界中を一人じめにしていた。それというのも、ジョルジュ・メリエスのようなえらい人物がいて、奇想天外なファンタスティックな映畫をつくり（「シンデレラ」とか「月世界旅行」）、劇映畫の最初の技術をひととおりそろえたからであった。その當時、アメリカは、まだ實寫ものまがいの映畫しかつくっていなかったので、メリエスの映

うけて、始めて劇映畫の技術を憶えた位、原始的な狀態であった。

一九〇八年ごろから、フランス映畫は、おとろえはじめた。妙なはなしだが、知識階級のひとたちが、映畫を藝術にしてやろうと考え、芝居を實寫にしたような文藝作品をつくりだしたのが、その原因であった。映畫がわからないひとたちの親切心は、いつでもそういう結果をまねく。映畫には映畫の法則のあることが、わからないからそうなったのである。

第一次世界大戰（一九一四——一八）で、フランス映畫はさらにおとろえた。このあいだに、アメリカが、いい映畫をつくりだした。映畫でなくては表現できないものを、スクリインにのぼせ、いまモンタアジュといっている映畫獨特の表現技法を發明した。こう

カ人によってきずかれたということができる。このとき以來、すくなくとも量的には、アメリカ映畫が、世界に君臨した。

だが、大戰後、フランスの映畫人は、アメリカ映畫の技術をまなび、それを實行するのに、フランス人特有の藝術的教養をもってしたので、たちまち、世界的な藝術的作品をつくりだした。こうしてフランス映畫の第二の黄金時代がきた。アベル・ガンスの「鐵路の白薔薇」やジャク・フェデルの「面影」、「雪崩」などはその例である。映畫理論の研究も、このころのフランスが一番さかんで、ことにムウシナックの「映畫＝リズム」の說は、世界的に影響するところがおおかった。映畫を「光と影の交響樂」であるとする「純粹映畫」という藝術運動さえおこった。

純粹映畫のひとたちから、後年フランス映畫の第一線にたつ監督者ルネ・クレエル、ピエエル・シュナルのような人物も出た。

一九二六年、破産のうきめにあおうとしていたアメリカのウォナア映畫會社が、わらでもつかむ氣もちで、トオキイ作品をつくった。それが興行的にあたったので、二三年後には、世界中の映畫が、無聲からトオキイへと變化した。そこで、映畫藝術（無聲）の技術的基礎は、大革命を經驗したのであるが、有能なトオキイ作家が、次第にあらわれて、うるさいガサツな初期のトオキイを、やがて藝術的な作品とすることに成功した。

フランスでは、ルネ・クレエルの「巴里の屋根の下」が、その第一歩であった。音聲の要素（耳にうったえる）と、イメエジの要素（目にうったえる）とを、調和のある全體として、情緒的にまとめあげるこころみが、まず成功したのである。フランスのトオキイ藝術は、このクレエルのこころみをもととして、急速な進歩を見せ、ジュリアン・デュヴィヴィエ、ジャク・フェデエル、ジャン・ルアルなどがこれにつづいた。

第二世界大戰がおこって、フランスの映畫事業は、ふたたびおとろえたが、クレエル、デュヴィヴイエ、ルノアルは、アメリカにわたって、仕事をつづけた。戰爭がおわると、クレエル、デュヴィヴイエは、あいついで故國にかえりフランス映畫の再建にとりかかった。アメリカにわたらなかったフランスの映畫人は、ドイツに抗戰しながら、とぼしい物質と人不足のなかで、製作をつづけた。その時代のマルセル・キャルネの大作「樂園の子供たち」は、昨年來アメリカで非常な評判になっている。

現在アメリカでは、イギリス映畫が、なかなか好評であるが、そのイギリスの批評家たちの說によると、いま世界で一番いい映畫をつくっているのは、フランスであるという。あたらしいフランス映畫が、期待される所以である。

その特質

フランス映畫は、アメリカのそれのように、大工業的にはつくられていない。撮影所は賃貸しがおおく、おおくの獨立プロダクションが、めいめいに個性のある作品をつくっている。そういう製作方法は、豪華な映畫をつくるのには適していないが、單にそれだけの理由からばかりでなく、フランス映畫は、おおがかりの作品には不得手である。そのかわり、ごく普通な人間の生活にも、映畫によくあらわしうる人間味をみいだして人生の眞實を、聲をおおきくしないで、しずかにかたるという特徴をもっている。セットの規模や、物語の事件の興味などには、あまり關心をもってはいない。それよりも、映畫に人間性を追求することが、フランスの映畫藝術家のこころざすところである。

したがって、フランス映畫にはこしらえものの感じが、よその國の映畫にくらべて、ずっとすくない。登場する人物は、英雄や佳人であることがまれである。みんなそこいらの町のなかでひろってきたような人間ばかりだ。だから、觀客は、見ていて、身ぢかな感じ

the flame of new orleans



クレーア（デイトリッヒ）は大陸を股にかけたゴールド、デイガアである。喰ひつめて、ニュー・オーリンズで、ひとはな咲かせんものと乗りこんできた。一八四一年、男は髯をつけ、女は長いスカートをなびかせ乍ら美しい腰の線を見せる時代。一夜オペラ劇場に於て觀客が舞臺よりもボックスの方を氣にしていた。それは何處かの美しい貴婦人が其の夜の華麗さを一人占めしているほど魅惑的だつたからである。隣のボックスに居た金持のギロード（ローランド・ヤング）は一瞬にして彼女に心を奪われてしまつた。そして二人は彼女の突然の氣絶を機會に知り合つたのである、この女こそ鴨を求めてニューオーリンズにきたクレーアである。ギロード老と知り合つたクレーアは女中のクレメンタイン（テレサ・ハリス）に一策をさづけた。女中は、ひそかにギロード邸を訪れ、御主人様は毎朝公園を馬車でお通りになるから、もしも貴方が男を上げたいなら、偽惡漢をやとつて御主人様の馬車を襲わせ、それを貴方が御助けになるといゝと云ふ。ギロードは膝を叩いて喜んだ。その翌朝、着飾つた

しかゝる中、思ひがけなくも一匹の猿が飛び出して馬車に轢かれんとした、その時、船乗り男が、あッと云ふ間にクレーアの馬車をひつくりかへして猿を救つたのであつた。クレーアは大憤慨をして家にかへり、ギロード老は開いた口がふさがらなかつた。この船乗り男はロバート（ブルース・キャボット）と呼ぶ小蒸氣船の船長である。翌日ギロード老は此の事で女の家を訪れた時、彼女は、それと知らず、妾のブランディを何處へやつたの、と怒鳴つてゐた最中だつた。これはまた如何にと、目をむいたギロードの前に、御すまし屋に咄嗟に變つたクレーアが現はれ、實は柄の悪い親類の娘がきましたので困つてしまひますと芝居をする。その後、數日、ギロードは痛風のため彼女を訪れる事が出來なくなる。その彼女の家へ、馬車の一件以來知つた船長のロバートが訪れ、危く彼の魅力に引きこまれそうになるが、今は大事な瀬戸ぎわと彼を追いかへしてしまふ。やがてギロード老から正式の結婚申込みがあり、待つてました、とばかり、彼女はニッコリ承知する。その婚約披露宴でクレーアが唄つている時、ロシア人のゾロトフ（ミッシャ・オウア）が近かづいて『よう別嬪さん、セント・ピーターズブルグ以來だネ』と云ふので彼女は此んな時は氣絶に限ると目をまわして倒れてしまふ。けつきよく、柄の悪い親類の娘と間違つたと云ふことになり、ギロードは其の邪魔な娘をどうかしてしまわねばと考へた末、幸ひ自分の銀行から金を借りているロバート船長に、若しも、クレーアの親類のあばずれ女を誘拐してくれるなら擔保の積荷は貰わずともよいといふ。ロバートは早くから彼女の一人二役を見ぬいていたので大喜びで其の仕事を引受けた。そしてギロード老の目の前でクレーアを誘拐し、二人は船上で楽して一夜パートと意氣投合してしまつたクレーアは、ギロードの結婚式當日に花嫁衣裳のまゝロバートの船へ逃け出してしまつた。

×

「オーケストラの少女」等一聯のダービン映畫、近くは「百萬人の音樂」の製作者ジョー・パスタナックの製作になる一九四一年度作品、ルネ・クレールが戰時のフランスを逃れて紐育へ現われたところを捕へて、丁度、「七人の罪人」と云ふデイトリッヒ映畫を製作したばかりのパスタナックが、彼女とクレールを結びつけたと云ふ面白い顔合せ映畫、もつともスタンバーグを離れたデイトリッヒは其の爲、ルビッチ、ジャック・フェデエなどと色んな大家と顔を合せたが、此ん粋な、しかしドイツ製美人を、フランスのお酒落監督がいかにさばくは興味あることである。

原作はノーマンクラスナの書卸しで、彼は「眞人間」「春を手さぐろ」「生命の雜踏」「激怒」などいかにもアメリカ調の作家であるが、今度は、デイトリッヒとルネクレールと云ふ註文の下に「喜劇」をお酒落風に書き卸している。キヤメラは「孔雀夫人」のルドルフ・マテ、主演者デイトリッヒの相手役は「モヒカン族の最後」のブルース・キャボット。「運命の饗宴」のローランド・ヤング、この他「天使の花園」のミッシャ・オウア、「驛馬車」のアンディ・デヴァイン、「追憶」のアン・リヴェア、舞臺女優のテレサ・ハリス、懐しいエミリイ・フイツロイ等が共演、ルネ・クレールは此のアメリカ映畫を皮切りに「俺は魔女と結婚した」「永遠と一日」「明日の出來事」「そして其處には誰も居なかつた」を監督したが最近はフランスへ歸つた。

淀川長治

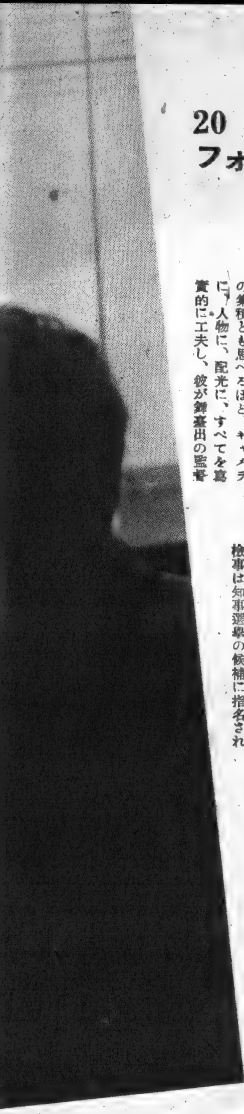
デイトリッヒ2態

ユニヴァーサル映畫・ルネ・クレエル作品 "炎の女"




Morning Record
MURDERER STILL AT LARGE
THE MURDERER
Late News
Tax Boost





20世紀フォックス映畫

影なき殺人

ルイ・ド・ロシユモンの製作になる一九四七年度作品、今年の春にアメリカで封切られたばかりの最も新しい映畫。ルイ・ド・ロシユモンは此れまでにも「九十二丁目の家」「マドレイヌ街十三番地」など半記錄的な映畫を製作してきた異色製作者であるが、此れもまた全部ロケイション撮影の實話の映畫化である。この實話はリーダース・ダイヂエストに掲載されたもので、殺人犯人が迷宮入りになつたまゝ今日に至つてゐる物語である。監督は舞臺出のエライア・カザン、此の人の監督作品はすでに「ブルックリン横丁」で御覧ずみのことゝ思ふが、その後、M、G、Mの第一級作品の監督になつてゐる。彼は「ブルックリン横丁」に於てもできる限り映畫の世界へ突き進まんとしてゐる努力が見えるが、それでも尙まだ舞臺の幕切れが隨所に顏を出していたようである。ところが今度は純然たる映畫手法に依つてこそ效果が上ると云へる記錄風の映畫である、この映畫はコネチカットのスタンフオードに於てロケイション撮影を行つたのみでなく、其の町の市民をエキストラに使用して畫面にリアリズム色を濃くしてゐるのである。この方法はアルフレッド・ヒッチコック監督の「疑惑の影」に於ても用ひられたが、今度の「影なき殺人」は、それが更に徹底されてゐるのである。ハリウッド映畫が撮影所のセットから逃れて自由な自然色を求めつゝあることは、「失われた週末」の紐育通りにも見られたが、今度は小說、戲曲、書卸し物語、それらよりも更に自然色の必要な實話殺人事件の映畫化である。そこでエライア・カザンは、あたかもニュース映畫の集積とも思へるほど、キャメラに、人物に、配光に、すべてを寫實的に工夫し、彼が舞臺出の監督であると云ふ其の弱點（?）を見事に打ち破つてゐるのである。脚色は活劇映畫に常に共力してゐるリチャード・マーフィが、きびきびした映畫脚色をもつてニュース・リール的なスピードを生み、撮影者のノーバート・ブローダインもシャープなスナップ風のタッチをもつて企畫の意圖に協力してゐる。

×

スタンフオードの町の、まだ人影の多い夜の道路で、一人の神父が拳銃で殺害された。神父の背後から頭の後ろを射ち貫いたのである。銃聲に人々は目を見はつた。男が、馳け出してゆく、あいつだ!! 町の人々が追つかけたが、雜踏の中に其の男は消えてしまつた。評判のいゝ神父だつただけに人々は此の犯人を憎悪した。やゝ長身で黑のオーバー・コート。これだけが目擊者たちの印象である。一週間、二週間、まだ犯人はあがらない。ようやく市民は警察の無能を責めはじめた。警察部長（リー・J・コッブ）は面目にかけても犯人をあげなければならぬ。色んな男が犯人の容疑者として擧げられだした。黑いオーバー・コートの通行人が、あつと云ふ間もなく警察へ引張りこまれる。こんな事で犯人があがるわけもあるまい。やつきになつた部長は一人の青年を四十時間責めたて眠る暇もあたへず訊問した末、無理矢理に自白書にサインさせてしまつた。その青年はジョン（アーサー・ケネディ）と云ふ何んでもない町の男である。唯いけなかつたのは犯人と同じ拳銃を持つていたのであつた。若い檢事ヘンリイ（ディナ・アンドリウス）は此の犯人の有罪を信じることができない。しかも檢事は知事選擧の候補に指名されている。自白書に旣に署名した男を電氣椅子に送れば警察も無能呼ばわりから救われ、彼自身も知事の名譽を得られるのであるが、彼は自分の將來を捨て、無實の青年を救ふために立つた。公判の日、彼は命を賭けて青年の無罪を證明した。

×

殺人犯人が迷宮のまゝに終つてしまふと云ふ事は或は實話に於てはありうるかも知れぬが、映畫の場合は此れは許るされぬと見えて、この映畫は最初、半狂人的神經質の男が殺される運命にある神父に精神病院行きをすゝめられているカットが加へられ、その男が神父を恨んでいるような仕組みが工夫され、この男が、神父殺害事件の公判にも傍聽席にあつて目を輝かせてゐる。そして、青年の無罪が立證されるや、あたふたと傍聽席を去るが、やがて其の翌日の新聞に青年の無罪發表のニュースとならんで、或る男が自動車事故で慘死した事件が寫眞入りで報ぜられている。その寫眞の男の顏こそ、傍聽席から逃げだした。あの男である。つまり、原名の「ブーメラング」が此の男になるわけである。「ブーメラング」と云ふのは土人の飛び道具で、投げると、曲線を描いてとんだ末、また、もとの投げ手のもとへ歸つてくる道具である。檢閲の上から此のような創話が加へられたのであらう。「ローラ殺人事件」のディナ・アンドリウス主演。助演のアーサー・ケネディは舞臺出の青年。リイ・J・コッブは「感激の町」のフラナガンの資本金相手。この他珍らしくも「失われたる地平線」のジエイン・ワイアットが若い檢事の妻に扮しで出演してゐる。（淀川長治）



BOOMERANG!



Judy Garland
(MGM)

きではなかろうか。

ひとつ・その生い立ちのこと

一九二二年六月十日、ミネソタ州グランド・ラピッド生れ。本名フランセス・ガム Frances Gumm――母はピアノ弾き、父は一座の指揮者。純粋の藝人の兩親。三番目の娘。

ベビー・フランセスは片言を話す前にうたつた。おなじみ「ジングル・ベル」に初舞臺(と若しも稱し得るならば)を踏んだのが三才の時、五才になると早くも姉さんと組んでヴォールカル・トリオを作りロサンゼルスの「キディ・レヴュウ」に「背縮」出演をしている。

一九三三年、姉妹三人組はシカゴに契約を貰つて乘り出したが、この時、大天幕の正面にデカデカと掲げられた看板を見て三人とも意氣消沈した。そこには故意か無意識か何れにもせよ "The Glum Sisters" と肝腎の苗字が誤植になつていた、幼い姉妹の落膽と歩調をそろえて興行も十分の落膽に値する成績だつたと傳えられるが、たゞひとつの收穫は、その時の座頭であつたジョージ・ジェセル(今の若いファン諸君は絶對に知るまいが、サイレント末期からトーキー初期にかけては映畫にまで招聘された大藝人で、三十年前の大女優ノーマ・タルマッジなどゝ浮名を立てたこともある)のすゝめによつてジュディ・ガーランドという現在の藝名をもらつたこと。このいわれは、當時のニューヨークに演劇批評家として有名だつたロバート・ガーランドの苗字と、フランセス自身が一番好きだつたジュディという名前を一緒にしてジェセルが作つたという傳説になつている。

間もなく姉さんが結婚して光榮あるヴォールカル・トリオは自然解消、ジュディはそれからひとり「我が道を往く」ことになり、加州のレソート・ホテルでうたつている所を一人のプロデューサアに「發見」され、そのすゝめで三ケ所のステュジオを遍歴して斷わられて、やがて一九三五年、十三才を以てMGMの契約を貰つたこと冒頭に述べた通りである。

MGMではじめて出たのは短篇音樂映畫「アメリカナの少女」だつた。この時ジュディはもう一人の新入り子供歌手との共演を命じられたのだがその相手こそ誰あろうディアナ・ダービンだつた。ジュディはスキングもうたい、ディアナはオペラをうたつた。結果は兩名とも「一日も早く忘れてしまいたいような出來」といつている所をみると相當ひどいものだつたらしい。これが崇つてかディアナはMGMを間もなくお拂い箱になり、ユニヴァーサルに拾われて「オーケストラの少女」を境に一氣にのし上げたことは諸君も御存知の筈。一方のジュディは廿世紀フォックスに借りられ「お下げパレード」に一本出演したものゝこの映畫もまたジュディにいわせれば「試寫の濟んだ晩は情なくて泣いちやつたわ」というほどのサンタンたる怪作だつた。

再びMGMに歸つたジュディは間もなくクラーク・ゲーブルの「運命の」誕生祝いに列らなり、ゲーブルを讃える一曲 Dear Mr. Gable をうたいまくつて、同席にあつた會社の幹部やスタアたちの一齊の注目を浴び、これがもとで「ブロードエイ・メロディ一九三八年」に出演の機會が與えられ、今日の大ガーランドの基礎が築かれた次第。

一九三九年の「オズの魔法師」から「アンディ・ハーディ叢書」を經てミッキー・ルーニーとの無數の共演映畫、一九四五年の「時計」のような全く「歌わない」役柄にさえ新鮮なヒットを證明した今となつては最早やその聲名は安泰堅固と稱して差支えなく、「親父」ルイズ・B・メイアと「亭主」ミネリ兩人一〇〇%の御滿悦にまでその繁榮は少くとももこゝ當分はつゞくものと思われる

妹尾篤司

ジュディぐらむぷす

ひとつ・そのゴ威勢のこと

いきなり小說的な記述を許して頂いて、さて、それは一九三五年、まだ世界中が平和を滿喫していた頃の晩春の一日のことだつた。一つの「幸運」がセイラー服と灰色のスラックスと綠色の運動靴を身につけてMGMの門をくぐつた。この「幸運」は年は十三、丸ポチャの人なつこい小むすめ、大きな褐色の眼と豊かな赤褐色の髪とあどけない笑いとがたまらなく可愛かつた――などゝ氣障つぽい話の切り出し方でひどく恐縮だが、ズバリ言つちまえばこれが後年の大スタア、ジュディ・ガーランドだつたのである。

ジュディは、然し、この日MGMを訪れる前に實はユニヴァーサルとリパブリックとパラマウントの三ケ所を歩いて全部斷られていたのである。理由は申し合わせたように(一)その容貌(二)その態度(三)わけて兩手の動かし方――が先方のお氣に召さなかつたから、というのだつたが、MGMのテスト掛だけは以上の好ましからざる三つの條件をカヴァするに足る第四の大變な長所を發見した。即ち「聲」である「歌」である。

四呎十吋の小柄の身體から出るヴォリュームに富んだ聲は Zing Went the Strings of My Heart のメロディを十分にロマンチックに且つ申し分なく陽的に展開してテスト掛を感激させ、「すぐに親父に來て貰つてくれー」という呼び出しに應じて現れた「親父」ルイズ・B・メイア(MGMの重役)をもつづけさまに感激させてめでたく契約成立、ここにジュディ自身の「幸運」とついでにMGMそのものの「幸運」とが根をおろすこととは相成つた。

それから十年經つて一九四五年。太平洋戰爭が終つた記念の年。そしてジュディにとつては劃期的なもろもろの出來事にいささか逆上氣味の一年でもあつた。

その一、ギャラップの世論調査で映畫スタア・ベスト・テンの一人に選ばれたこと

その二、三十七才の監督ヴィンセント・ミネリと結婚したこと

その三、「聖ルイで會いましょう」「時計」「ジーグフェルド・フォリーズ」「ハーヴェイ・ガールズ」の四本がそれぞれ理想的なヒットをヒットしたこと

こうしてこの年、二十三才の「張り切り青春」は週給一二五弗の昔から二五〇〇弗へとのし上つた自分自身を見出し、映畫とラジオとレコードと實演とを合計すれば優に一〇〇萬弗を超えるゴ威勢をことおぐ身分に成り上つたわけであるが、しかしそれにも拘らずジュディは一向に「金持」らしい氣持にはなれないでいる。何故なら、その七二%は税金に、一〇%は支配人に、一〇%は戰爭臨時公債にと化けて逃げたからである。

そこでジュディは勇を鼓して「一稼ぎするために」花屋を開業もしてみたものゝ、仕入と賣收との比率がまるで出タラ目で忽ち閉店、昨年の秋には土地の方へ投資しようなどゝ大變な氣の入れ方だつたが、その後どうなつたかは分らない。兎もあれジュディはいつもブツクサとぼやくのである。

"Finance is kind of complicated." (財政つて厄介なものねえ!)

ひとつ・そのゴ趣味のこと

ジュディは今年二十五才。精神的にも肉體的にも立派に大人ではあるが、依然として小柄であることに變りはなく、身長五呎二吋、體重一〇二ポンドというのでは、今を時めくイングリッド・バーグマンの五呎八吋、一三二ポンドの前には貧弱な小娘としか映らない。レディ・メードの着物を買いに行けばサイズ9か10が丁度手頃と冷やかされるようでは推して知るべし。だからジュディは既成服は原則として買いませんという。御注文はビヴァリー・ヒルスのアドリアン、アイリーンあるいはニューヨークのヴァレンチナのお店に決めている。

ジュディはしがない藝人の子供として幼い頃から舞臺に立つた關係から、世の常の娘とちがつて正規の敎育も受けなければ女學校生活の樂しさも經驗していない。そしていま知的なるものへの渇仰は猛然として彼女自身を讀書の三昧境に驅り立てるのである。

何でも知りたい、覺えたい――たゞその一筋にあらゆる種類のあらゆる勉强をおしまない。四三年には何と心理學の勉强をさへ初めたというが、この間の消息についてジュディがハリウッドの顔役であり、第一級的なゴシップ・ライターでもあるルエラ・パースンス女史に語つたという次の言葉は、涙モロい筆者をして「胸せまる思い」を餘儀させたものである。

"May be I'm trying to make up for having missed college." (カレッジへ行けなかつた穴うめかも知れないわ)

二十年にわたる藝人生活とようやくかち得た今日の成功にも拘らず、ジュディに尊大ぶつた點のないのはひとえに「無教育の穴うめに勉强しよう」と努めるこうした心構えに由來する所かも知れない。現在ジュディは新しい役を振られるたびに不眠性に悩むまでの研究を忘れず、セットには遲れず、科白をトチらず、ハリウッド語でいう director's dream.(監督の夢想する女優) No. 1 としての名聲を失つていな、のである。

食べもの? YES・SIR ジュディは、食べる。盛大に食べる。好物はスパゲティ、ハンバーガー、アイスクリーム、ピナツ・バター、そして固體液狀を問はずあらゆるチョコレート。

スポーツ? NO! やらない、滅多にやらない。ジッと坐つて本を讀むかレコードを聞くのが大好き。そのレコード蒐集の量は相當なものがあり、幅は實にショスタコヴィチからシナトラに及ぶというから呆れたい人は呆れて差支えなかろう。

勿論、歌はジュディの第二の天性である。しかも映畫の上と同様に「マフラーを被せた」歌い方は大きらいで常にヴォリュームをフルに歌いまくる。一番お氣に召すのは自動車の上で歌うこと、そしてそれからお風呂の中。當時の愛唱歌はジェローム・カーンの They didn't believe Me.

ひとつ・その「心臓」のこと

後に述べるようにジュディ「出世」のいと口はクラーク・ゲーブルの誕生祝の席上でうたつた Dear Mr. Gable の一曲にあつたのだが、これから忖度してジュディの理想の男性は、ゲーブル的な筋肉性、野人性にあるという噂がひと頃馬鹿に流布されたことがあつたが、實は全く正反對であつた事實が一九四一年にバクロされた。

ジュディはこの年、十九才で初の結婚をしたのである。旦那様はマーサ「大口」レイの前の御亭主だつたデヴィッド・ローズで音樂家兼作曲家、ゲーブルとは反對の純粋二枚目型優男でしばらくは夫婦仲も圓滿だつたが、職業的なトラブル――文字通りに Career trouble という奴で二年後に離婚し、やがて現れたのがこれまた反筋肉型の男性ヴィンセント・ミネリであつた。

ミネリは四五年度のジュディ作品四本のうちの三本を直接監督の任に當つたのだが、「溫和な口調と思慮深い眼と本當の紳士らしい教養の高さと藝術への理解をもつた男性でございます」というジュディの頌辭を素直に受取つて、さてその寫眞をしげしげと眺めてみると出來のわるいエディ・キャンターのよな、草臥れたジミー・スチュアートのような、どうも餘り見榮えのしない殿様なので些かがつかりさせられるが、兎に角ジュディは目下この旦那様に crazy about なのだからめでたし、めでたし。しかも昨年暮には珠のような赤ちやんも誕生いたしました。

だが正直の所、あれほど世間で評判されたミッキー・ルーニーをはじめ他のいかなる男性ともいわゆる桃色沙汰の醜聞をバラまかず僅かに二人、それもどちらも結婚にまで持ち込む程に血道をあけたジュディの「心臓」に關してはは場所がハリウッドだけに好感を持つてやつて然るべ





Linda Darnell

[illegible]
[illegible]……人間が常に待ていなかながら、ん知り監督をジョン・M・スタアルからオット・プレミンガアにかえるとともに『とりのこされた廣場』『墮ちたる天使』『百年目に廻りくる夏』『アンナとシャム王』『荒野の決闘』と娘役をかなぐりすて徐々に新しい境地をきづきつつあつたリンダ・ダーネルにアムバアの白羽の矢がたてられた。

★これは、まつたく突然のことで、アムバアのテストをするわけでもなしザナックの天下りキャスティングであつた。とうの昔アムバアをあきらめていた彼女はこの報せに、生まれてはじめて、氣絶しそうになつたというか[illegible]……撮影がアムバアで一つの[illegible]ことになるにちがいない。

★私生活において、彼女はペヴァレル・マアレイとの結婚生活を精算しようとしている。家庭的にはあまりめぐまれていなかつたリンダ（彼女は母が自分を喰いものにしようとしているのをきらつて、決してテキサスの家に歸ろうと考えたことがなかつたほどである）は、結婚生活中、優しく賢明なペヴにあたえられるところおほかつた。そのペヴの手をはなれた彼女は、いよいよ自分の信ずる道をあるく決意をかためたものであろう。ともあれ一九四七年はリンダ・ダーネルの大きなタアニング・ポイントになるわけだ。（岡俊雄）

ジェイムス・スチュアート

[illegible]一九四四年末には大佐に昇進した。第二次大戰でも、もつとも動功をしめした映畫人というべきである。

★昨年武勳に輝いて復員したジミイ・スチュアート大佐は再びハリウッドに復歸し「我が家の樂園」「スミス都え行く」で俳優としての彼を今日あらしめた、フランク・キャプラの師恩に感じ、リバティ・フィルムでキャプラの「素晴しき人生」に出演し、ひきつづいて同社でウィリアム・ウェルマンの「魔法の町」に主演した。

★ジェイムス・スチュアート――スコッチ・アイリッシュ系アメリカ人として一九〇九年五月二〇日、ペンシルヴァニア州インディアナの一角ヴィネガア・ヒルの金物屋を家業とする家で生まれた。瘠せこけて眼鏡をかけたこの少年は、活動寫眞に熱中にして、映畫のヒーロを夢めみ、憧れ、自分の理想は活劇の主人公そのものであるように考えたりした。

★長ずるに及び、プリンストン大學に入學。建築を專攻としたが、在學中には演劇グループに加わつていた。卒業後、マサチュセッツ州ファルマウスの地方劇團の招きに應じナイト・クラブなどでアコオディオンをひいたり劇場に出たりしていたが、ここからバルティモアの劇團にうつつた。ここには、當時まだ無名のマアガレット・サラヴァンやヘンリイ・フォンダがいて、ジミイは彼等と親しくなつた。フォンダとの親交はいまなおつづいていて、昨年ハリウッドに戻つたとき、家がみつかるまでフォンダの家にいたほどである。そのあとでニュウヨオクに出て、ブロオドウェイの檜舞臺で「黃熱病」という劇に一役もらいこれが評判となつてスクリイン・テストをうけてハリウッドに入つた。その後の順調なスタア航路は冒頭にのべたとうりである。

★彼はあまり本を讀まない。そのことについて彼は大いに恥としているようである。しかし、讀んだものからは必ずなにか感じ、自分のためにとりいれようとしている。しかし彼のいま住んでいるブレントウッドの家の裏手の書齊には壁に小いさやな臺をつくつてそこに本をならべはじめている。

★性格は至つて內氣な方で、その氣のよわさが映畫でも彼のよきパァスナリティの一部をなしていることはよくみられるところである。とくに女に對してはひどいはにかみやだ。女の子に對する趣味がよい。彼は以前、オリヴィア・デ・ハヴィランドやリタ・ヘイウォースとのロマンスが傳えられていた。現在はアニタ・コルビィと取さたされているが彼はこのロマンスについてさらにさらに口を開かないのである。

★いつもチュウイン・ガムをかじつている。そして、ゴルフか釣りに出かけたり、フォンダが模型飛行機をつくるのを手傳つたり、パアティに出席して時間をつぶす。

★いわゆるベスト・ドレッサアという型とはおよそ反對で着物に無關心である。着古したズボンにスウェイタア、ソックスに鹿革の靴でいられればよいと考えている方である。だから衣裳もちでないことも勿論だ。

★食事についてもむづかしやではない。但しオレジ・ジュウスだけは缺かせない。まづ朝おきると一杯のオレンジ・ジュウスがないと氣がすまない。また食事をはじめると超スピードで平げてしまう。

★生來の映畫ファンであることは前にもふれたが、目下、イングリッド・バァグマンとスペンサア・トレイシィのファンで、バァグマンとは是非共演したがつている。またバアバラ・スタンウィックも彼の共演したいスタアとしてすてきな女優だと考えている。もし自分がスタアにならなかつたら、きつとスタアのところに押しかけてサインをねだるようなファンになつたかもしれない。

★親友はヘンリイ・フォンダ、マアガレット・サラヴァンのほかにケイリイ・グラントと彼のゴルフ友達のMGMの配役主任のビル・グラディなど。

★廣い部屋に大きなベッドでひとりでねるのがすきだ。軍隊に行く前にはパジャマを用いていたが。現在は裸で寢る。就床時間は一定していない。つかれた時に寢床にはいる。

★ジェイムス・スチュアート――ハリウッドの輝けるバチェラア・スタアも最近は結婚しておちついた生活に入りたいと、ひどく眞劍に考えているそうである。どうです、われとおもわん方ははるかに名乘りをあげられては……。

岡 俊 雄

CINE ROMANCE PROFILE

リンダ・ダーネル

★ダリル・F・ザナックが「風と共に去りぬ」に比肩する大作と意氣ごむ「永遠のアムバア」（前號紹介）の主役にえらばれたリンダ・ダーネル。映畫の初出演は一九三九年で、わが國でも戰前からポオトレイトが映畫雜誌にしばしば紹介され、おなじみであるが、日本でのスクリイン・デビュは今度の「荒野の決闘」である。

★テキサス州のダラスは西部劇でよく出てくる名前（「驛馬車」の街がそうである）であるが、彼女はそこで生れた。五才の時からダンスの練習をはじめ、十一才の時寫眞のモデルになつた。朝は學校、晝からモデル、夜はダンスの稽古と子供としてははげしい毎日をおくつていた。鋼鐵のやうな强　な身體と不撓不屈の精神がよくそれにこたえて、今日の彼女たらしむるものとなつた。

★とにかく、十一才で初舞臺十五才で人氣スタアとなり、十九才でやり下り坂と見られたが、二十三才の今日再び人氣をとりもどした彼女の芝居的な經驗は十三才の時である。ダラスの小さな演劇グループの一員となつて熱心に勉强をはじめていた最中、二十世紀フォックスのニュウ・フェイス發見係にほり出されてハリウッドえ行つたのが十四才。この時は若すぎるという理由で不合格となり、彼女はひどく落膽してテキサスに歸つた。その後十三月間、彼女は熱心に自分の寫眞をフォックスに送つた。その根氣にまけて二度目のテストが行われ、みごとにパスした。同じ新人を二度もテストをして採用するなどということはハリウッドでは千に一度もあるかなしという稀有の出來ごとで、しかも、一躍スタダムにはねあがつてしまつたのであるから彼女の幸運のほどを知るべきである。この時リンダは僅か十五才の時であつた。

★一九三九年、グレゴリイ・ラトフ監督の「女のホテル」でアン・サザーンに次いで俳優順位第二位という堂々たるデビュをした。それから四年間、タイロン・パワア（血と砂）ヘンリイ・フォンダ（ブライアム・ヤング）等大スタアの相手役として可憐な娘役で賣りだして當時のリンダはまさにやさしい乙女であり、誰にもさからわず、いわれるままを默々として演じていた。

★生長するとともに、彼女は自分自身のことを考えるようになつた。二十一才になつた彼女は、誕生日を終えた間もないある日、もう平凡なやさしい女になることをやめようと決心した。彼女の心をとらえてはなさなかつたのは、彼女のテスト撮影の時から、第一回作品の撮影に至るまでいろいろと忠告をあたえてくれた、ヴェテランのカメラアン、ベヴァレル・マアレイのことだつた。彼女はベヴを愛し、結婚しようとおもつたが、周圍では彼女の前途のために年のちがいすぎるこの一組の結婚をやめるよう。注告する者もおおかつた。しかし、彼女はもはや、はつきりした意志をもつた女性であつた。こうと思つた相手をみつけたとき、彼が逡巡していれば自らすすんで自分の魅力の擒にしなければやまぬ强烈な性格のもち主に變貌してきたのである。後年、この性格がもの言つて「永遠のアムバア」をやる下地ができたというべきであろう。

★彼女の内心の成長と共に徐々にパアスナリティの微妙な變化が起つてきた。その結果、娘役でもたなくなつてしまつた。彼女にとつては公私ともに一轉機となつたのだが、フォックスでも、もてあましとみえ、あまり重要でない役をふりあてられたりしてついには、十九ヶ月間全然役がつかないようにまでなつた。しかし、リンダはまけていなかつた。彼女は各方面に猛運動を開始し、その結果としてえた出演映畫は、フォックスならぬ、獨立小プロダクションの申出で、いわばバッドガアルの役所であつた。フォックスではこの出演に勿論反對した。娘型の彼女に向かないというのが理由であつたが、彼女は机を叩き聲をはりあげて反對して、その「夏の嵐」という映畫に出演した。この映畫の成功が彼女の役柄に一轉機を與えた。ビング・クロスビイが製作した「偉大なるジョン・L・サリヴァン」や「明日の出來事」等、他社の作品に續けさまに出たが、いづれもフォックスでは彼女には不適當と判斷するような作品ばかりにでていた。

★二十世紀フォックスで「ベルナデットの歌」の製作開始が決定され人選が問題となるや、リンダはその主役を望んだが、彼女の努力にもかかわらず、ベルナデットは目の前を素通りしてセルズニックから借りられたジェニファ・ジョオーンズにまわつた。そしてジェニファはこれでアカデミイ演技賞をもらつた。リンダたるもの、大いに口惜しがつたのは無理もないことである。

★しかし、そのあとでまつたくこれと反對の場合が起つている。「永遠のアムバア」のときがそれで、この原作をフォックスが買つたとき、リンダは直ちにアムバアをやりたいと言いだしたが、またしても、そのタイプではないとうけつけられなかつた。ザナックは、セルズニックがスカアレット・オハラをさがしたようにアムバア女優を全米、いや海外に

James Stewart



★クラアク・ゲイブル、マアナ・ロイ、故ジイン・ハアロウなどが賑やかに競演していたそしてバカバカしいほどおもしろかつた映畫「妻と女秘書」でハアロウの純情な戀人となつて當時の尖端的お孃さまたちから「あら可愛いワネ」と認められた長身の靑年ジェイムス・スチュアート。ここいらから彼らしいひらめきが光茫をはなちはじめた。もつともこの前に「鋪道の殺人」や「ロオズ・マリイ」に出演している。

★そして「小都會の女」「超スピード時代」「豪華一代女」「踊るアメリカ艦隊」「夕陽特急」「第七天國」「陽氣な御婦人」「結婚設計圖」「我が家の樂園」と、出演映畫のピッチが上昇するとともにサラリイもスタア級となり、ハリウッドで當時もつともいそがしい若手として「スミス都え行く」「お互いのために」「桃色の店」「砂塵」「美人劇場」「フィラデルフィア物語」「死の嵐」「ねえ私と暮しましょう」と矢つぎばやの出演ぶりで「フィラデルフィア物語」では一九四〇年度のアカデミイ演技賞をうけるまでなつた。

★一九四一年三月。オスカアをうけたジミイはその後間もなく、自らすすんで一兵卒として入隊した。この轉身にはアメリカのファンたちもアッとたまげたようである。「ライフ」誌では俳優から兵隊になる日のジミイの一日を大々的なグラフに組み全米のセンセイションとなつた。第二次大戰に參加した映畫人は數おおいが、アメリカで軍籍に身を投じた一番槍はこのジミイ・スチュアートである、

★かくして、カルフォルニア州フォート・マクアーサア航空隊づきとなつたジミイはニュウ・メキシコ州アルバカアクの爆擊學校で訓練をうけ、その後將校に昇進、一九四三年八月アイオワ州ジョウ・シティ基地のB24爆擊機隊で一編隊を指揮するようになり、四ヶ月後には第八航空隊附として渡英、一〇機のB24と一〇〇人の部下を率い對獨爆擊に參加した。彼等の最初の任務はブレーメン爆擊で、彼自らも "Nine Yanks and a Jerk" と名づけた愛機を驅つて戰火をくぐつた。そして一九四四年一月には少佐となり、戰功とともに隊長しても拔群の成績をしめて、標葉賞や



まつた。
そのとき、遠くの方でかすかに太鼓の音がした。それは次第に近づいて來た。
「惡魔の呼び聲がする。きさまは何でこんなところへ俺をつれて來たんだ。」
とサン・タヴィは呻くように云つたが、二人とも遂に意識を失いはじめた。
それから暫くして、數名のホガール人がそこに現われた。士官を抱き起した男の右手は人差し指と子指の間の二本の指がなかつた。

傳說の國

二人のフランス士官は一體何故この中央アフリカのアジ・タルヒット沙漠で、道に迷い、そして命をおとしかけたのであろうか、それには、こんな因縁があるのだ。
モランジュ大尉とサン・タヴィ中尉は、數週間から行方不明をつたえられている若いフランスの考古學者フランソア・マソンを探しに、この沙漠へと出發した。それは一週間まえのことである。
考古學者マソンは、この沙漠の果にあるホガール山脈の高地のどこかにアトランチスという傳說の國が現に存在していると固く信じていた。そしてアントラナスの國には古い文化が殘つており、一人の女王——その名前はアンチネアといつた——が支配していると主張した。アンチネア女王は妖艶な女性で、その上男を魅惑する術にかけては列ぶものがないという話をマソンは信じていた彼はアトランチスを發見するために出發した。しかし、其後、消息が途だえてしまつた。二人の士官は、彼の行方を探すために、フランス軍の屯所を後にし、考古學者と同じ運命に陥つてしまつたのである。

洞窟の部屋

サン・タヴィ中尉は、ふと意識を回復した。彼はあたりを見廻わした。彼のそばに一人のホガール人が立つていた。覆面した男の右手の指が缺けていた。
「ここは何處なんだ」とサン・タヴィがたづねた。
「アンチネア女王の國」と相手は答えた。
「モランジュ大尉は何處にいるんだ」とサン・タヴィは、自分が一人だけなので、心配になつて訊ねた。
「そんな人は知らない。連れて來たのは貴方だけだ。沙漠のなかで貴方は死にかけていた。私が救つてあげた。このエガリがです。」
と覆面した男は云つた。
その時、サン・タヴィの耳に銅羅の音がきこえた。ついで絃樂器の音と女たちの聲がそれに交つて何處からとなく、きこえて來た。
「あの音は何だれ」と彼は疑うような眼でエガリのほうを見た。
「アンチネア女王が客を歡待しているのです。だが、貴方は、この部屋から離れてはいけない。それに[illegible]たら私を呼びなさい。」といつて覆面の男は部屋から出ていつた。
サン・タヴィは、あたりに注意した。洞窟をえぐつて作られた部屋らしい。隅には不思議な恰好の置物がある。スフィンクスのような彫像。どこかに東洋趣味らしいものが感じられるが、また西洋趣味も混合している。
「マソンが云つたアトランチスの國がこれなのだな。矢張り本當に存在してたのだ。」
とサン・タヴィは、信じられないかの樣につぶやいた。そして彼は再び眠りに陥いつた。

モランジュを探して

夜であつた。あたりはシーンとしている。部屋の中に一人殘されたサン・タヴィは、モランジュの安否がしきりと氣になつてきた。
扉の外は通路になつていた。すこし行くと行手はつかえていた。眞暗である。右手を見ると遠くにチラリと灯がみえる。それで手さぐりで進むとまた壁にぶつかつた。灯はそこにある鏡に反射していたらしい。左手にあたつて部屋の隙間から灯が洩れている。ソッと扉を押してみた。
一人の男が歩きながら本を讀んでいた。頭髮のちぢれた中年男で、ガウンを着ていた。片方の壁面は本がぎつしりつまつた書棚が何段にも設けられている。
「何しに入つて來たんだ、君は？」
と中年男は聲を荒げた。
「モランジュという士官の姿を君はみなかつたか、たしかに、この洞窟の中にいるに違いない。」



あとらんてぃす ATLANTIS

植草甚一

ユナイテッド・アーティスツ發賣、ネロ映畫。セイモア・ネーベンツァール製作。ピエル・ブノア原作 アーサー・リプリイ監督 カール・シュトラウス撮影。テクニカラー大作

配役

アンチネア……………マリア・モンテス
サン・タヴイ中尉………ジャン・ピエエル・オーモン
モランジュ大尉……デニス・オーキーフイ
ル・メスジュ……モリス・カーノフスキイ
タニット・ゼルガ……ミラダ・ムラドヴァ
キヤデルウス伯爵…ウラジミル・ソコロフ

解説

目下サミユエル・ゴオルドウイン撮影所で製作中のテクニカラー大作。フランス文學界で有名なピエエル・ブノアの原作「ラトランテイド」にもとづいたエキゾテイズム映畫の代表作。既に、この小説は二回映畫化されている。すなわち、サイレント映畫時代にフランスで名匠ジャック・フェデエがスタシアナ・ナピエルコウスカという強烈な肉體的魅力を持つ女優とジャン・アンジエロ主演で映畫化し「女郎蜘蛛」という題名で日本でも公開された。ついでトオキイ時代となつてから、ドイツで名監督パブストがブリギッテ・ヘルムとグスタフ・デイゼル主演で映畫化し「熱砂の女王」という題名で日本で公開された。ともに映畫藝術の香高い傑作であつた。

それ故、今度の映畫化は三回目である。アンチネアに扮するのは目下評判の新スター、マリア・モンテス、相手役は彼女の良人であり「みどりの園」「沐浴」などで知られたフランス俳優ジャン・ピエール・オーモンと新人デニス・オーキーフイ、傍役には「アメリカ交響樂」のモリス・カーノフスキイ、以前から知られた名優ウラジミル・ソコロフ、バレエ・リュス・ド・モンテ・カルロ出身で最近「オクラホマ」に出演していたミラダ・ムラドヴァ等が名を連ねている。期待すべき大作といえよう。

沙漠の涯で

一發の銃聲が、沙漠のなかで、乾いた音をたてた。一頭の駱駝が頭をがくりと砂のなかに埋めるようにし、四肢をけいれんさして動かなくなつた。

ピストルを手にしたサン・タヴィ中尉の眼がしらは血走つていた。

「おれたちも、ぢきに死ぬんだ。」

と彼は絶望的な薄笑いをもらすなり、つゞけて二發、空にむけ、パン、パンと發砲した。

空には一點の雪もなく、ギラギラする太陽は、なさけ用捨なく砂漠をすゝむ三人の男を照りつけていた。

「おい、しつかりしろ、望みはまだあるんだ。」

とモランジュ大尉は、サン・タヴィ中尉をふり向き、彼の手を引ばるようにして、沙漠のなかをすすんだ。

すこし後から、この二人のフランス士官について歩いていたガイ

かに倒れた。喉の渇きに堪えられなくなつたのであろう。殆ど息をする氣力も彼からは失われていた。

サン・タヴィは、半ば氣が狂つたかのように、倒れたガイドへ向け銃口の狙いをつけた。モランジュは矢庭にそのピストルをもぎ取つて遠くへ投げすてた。

「あの儘にして置け。」

と云つたモランジュは、サン・タヴィの片手を彼の背にまわし、再び北の方向えと歩きはじめた。

彼等は一時間ほど進んだ。そのとき奇蹟のように、彼等の眼前にオアシスが出現した。

「オアシスだ。」

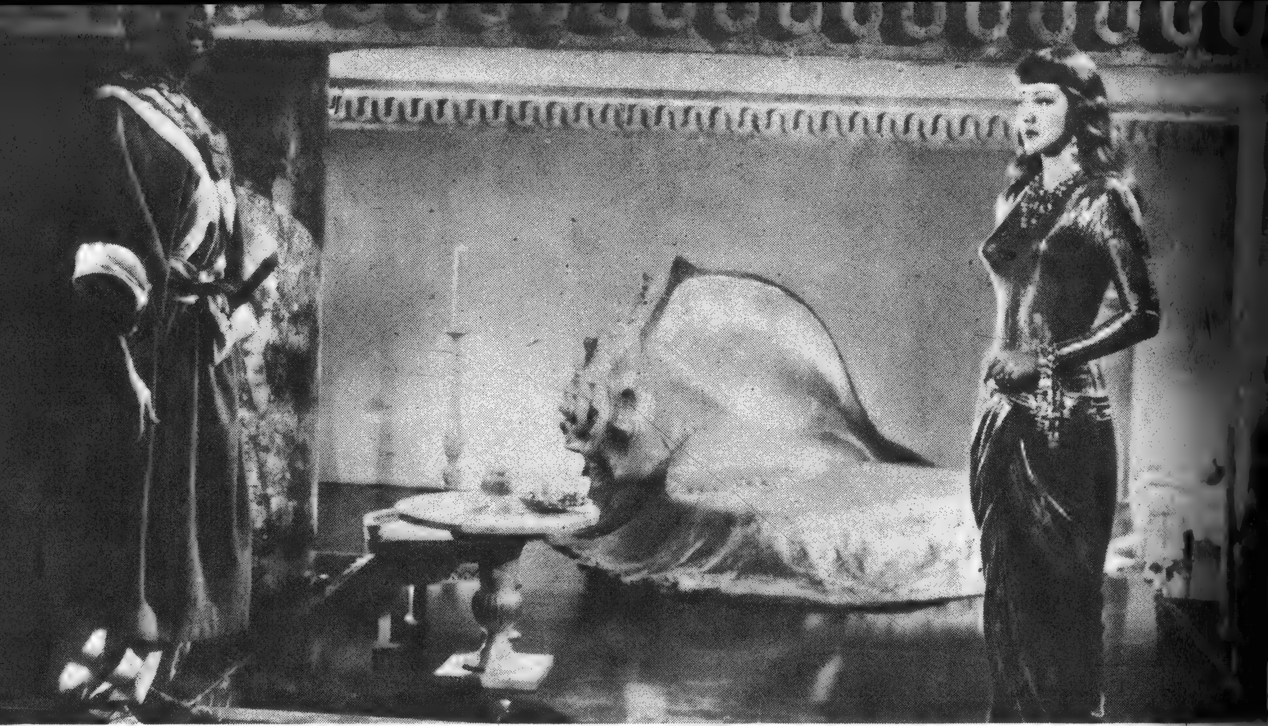
とモランジュは叫んだ。サン・タヴィはころがるように駈け出した。

彼は、砂のなかに堀つた深い穴の蓋を夢中ではぎとつた。

「空だ！」

という絶望的な聲がサン・タヴィの口から洩れた。モランジュも、その穴をのぞき込んだきり何も云うことが出來なかつた。

最後の望みの綱を切られた二人



とフラフラ歩き出した。サン・タヴィは彼にしたがつた。右に折れ左に折れて行くと、やがて廣い部屋の入口に來た。

「あれがアンチネアだ。人殺しめ。」とモランジュは小聲でいつた。「きつと復讐してみせる。」

戀のとりこ

サン・タヴィは彼にも同じような運命がふりかかるとは露にも思つていなかつた。

翌日、彼の部屋にエガリが現われた。

「アンチネア女王がお呼びです」

サン・タヴィは、彼の案内で秘密の通路をぬけ、前の日に見た大廣間へと來た。そこにはアンチネアが、彼を歡待するかのように待構えていた。

「あなたが、モランジュのお友ちですのね。」とアンチネアは彼女の前のソファに彼をかけさせて云つた。

「今日は貴方に見せたい踊りがありますの。」

彼女の命令で、すぐ踊りが初まつた。太鼓の響につれて東洋的な踊りを舞うのは、モランジュと脱走の手筈をしたタニット・ゼルかであつた。

アンチネアはサン・タヴィの傍にかけて、美酒を盛つたコップを彼にすすめた。

むし暑い夜であつた。窓外には丸い月が黄色いランプのように熱帶地の風景を照らしていた。部屋の照明も不思議な魔術的な感じを强めていた。踊りが高潮にたつした。幾人かのホガール人が覆面の踊りをした。美酒のため夢見心地になつたサン・タヴィ中尉は彼の傍のアンチネアの體臭をかいだ。

「あたしの戀人、これを記念に首にかけて下さらない。」と云つて彼女は、自分の頸飾を外して彼にかけた。彼女は彼に煙草をすすめた。サン・タヴィはすすめられるままに煙草に火をつけた。だが一服すい二服すう内に、彼の意識は次第に亂れて何が何だか分らなくなつてしまつた。

眼をさました時、彼はベッドの中にいた。傍ではアンチネアが彼を打ち眺めていた。彼女の指にはまつた大きな寶石が光つた。

「モランジュはどうしたろう」と云うなり彼はベットから飛び起きた。

「お友達のことなら心配ないわ」とアンチネアは彼の首に腕をまわして云つた。「貴方が寢ている間に、踊子のタニットと脱走しようとしたんです。だけど部下の者が捕えて地下室に閉ぢ込めてあるわ。」

「あなたは彼を殺すつもりか。」とサン・タヴィは相手をみつめた。

「貴方に殺して貰いたいのよ」とアンチネアは答えた。そして彼に金の柄の鋭利なナイフをつかました。

サン・タヴィの物語

それから一ケ月後、フランス軍の屯所ではモランジュ一行の行方不明を氣づかつて再度の搜査隊を組織した。そして彼等は、沙漠をさまようサン・タヴィ中尉の變り果てた姿を發見した。

屯所の病院で彼が語つた物語は誰も信じる者はなかつた。彼がアンチネアを見た瞬間から彼女の魅力のとりこになり、ナイフをつかまされ、それで友であるモランジュを殺したこと、日となく夜となく爛れた戀の享樂、魔藥の不思議なきゝめ、そして次第に良心にさいなまれ、氣が狂うようになつてアンチネアのところから逃げ出し沙漠を彷徨したことなど。彼は氣狂い扱いにされた。だが、サン・タヴィにとつては確かに現實の出來事であつたのである。

それから幾月か經つた。或る日意外な訪問者があつた。それは右手に指のないエガリであつた。彼はアンチネアがサン・タヴィにもう一度會いたいという傳言をもつて訪れたのである。

アンチネアという一言、それは彼にとつて最も強い刺戟であつた。彼は見果てぬ幻を追うかのように再び駱駝にまたがつて從者エガリとともに沙漠へと出發するのであつた。





「モランジュだと？　そんな男は知らんれ。まあ、かけ給え。一體どうしたんだ。」
「僕たち二人は行方不明になつた考古學者マツンを探しに沙漠に來た。ところが道に迷つた。死にかけた。氣がついて見ると、此處にいるんだ。こゝがアトランチスの國なんだれ。」
「如何にも、その通りだ。この俺も君と同じような運命で此處へ來た。もう十年以上も前の話だ。だが、俺は他の男たちのように殺されなかつた。」
「他の男たちがどうかしたのか。」
「今に君にも分るだろう。大低の男は殺されてしまうんだ。俺は例外だ。それにもう一人例外がいる。それはコルトオだ。矢張りフランス人だ。彼はアンチネアの戀人だつた。どういう譯か、彼は殺されなかつた。だが、舌を切られてしまつたよ。」
「ではマツンも殺されたのか。」
「うん、殺された。」
「君は此處で何をしている。」
「アンチネアの相談役だ。名前はル・メスジュだ。お望みなら、この國の傳説を話してあげようかれ。」
夜がふけるまでル・メスジュの話はつづいた。それは半ば信じられない、しかも現に起つている出來ごとなのだ。
「アンチネアがどんな女か分つたろう」と語り手は言葉をついだ。
「彼女はもとパリの踊子の娘であつた。こゝにいる老人キャデルウスー―彼はもと伯爵だつた――との間に生れた娘だ。ずつと昔、彼はこの沙漠にアトランチスという傳説の國を發見した。そして、その儘そこに住んだ。この場所がすなわちそうだ。だが老人の娘アンチネアは、母親から受けついだ美貌と男をたらし込む術とで、世界に二人といない妖婦のようになつた。」
「アンチネアは男に惚れ、倦きるとすぐに殺してしまう。」
そのとき一人の男が入つて來て手眞似でル・メスジュに何か云つた。彼がアンチネアのために舌をぬかれたコルトオであることは直ぐに分つた。二人は彼を殘して部屋を出た。

赤大理石部屋の秘密

數日が經過した。
或る日、サン・タヴィはル・メスジュの部屋へ忍び込んで、前夜彼が姿を消した廊下の方へと秘密をさぐりに出かけた。その通路は地下へとつゞていた。赤大理石部屋といわれる秘密の部屋へ入つた時、彼はその奇怪な部屋の有様に茫然とした。
廣い地下部屋の周圍は、それぞれの區切りがあつて、たくさんのミイラがたてかけてあつた。近よつて見ると、どのミイラにも名前がついているではないか？　ふと見ると行方不明のフランソア・マツンそつくりのミイラがある。彼はギヨつとした。
その時、足音が戸口でした。彼は物かげに隱れた。入つて來たのは、まがうかたないモランジュ大尉である。だが、彼の態度はどこか常人ばなれしていた。
「おい、モランジュ君」とサン・タヴィは近づいて云つた。「僕は今まで君を探していたんだ。」
だが、相手は虚ろな視線で彼を眺めるだけであつた。
「僕が分らないのか、君」と彼は云つた。「サン・タヴィだ。一體君は今迄どこにいたんだ。」
「アンチネアは殺人鬼だ。」とモランジュはつぶやいた。そしてマツンのミイラを指さしながら「俺もあのようにされるんだ。あの女は人殺しだ。俺を魔藥で、こんな人間にしてしまつた。」
「君の云うことは、さつぱり分らない。どうしたんだ。」
「俺は逃げ出す約束をした。タニット・ゼルがという踊子がいる。それと一緒にだ。彼女にはセゲイアという戀人がいる。俺たち三人は逃げ出す約束をした。そのあとでアンチネアに復讐してやるんだ。」
モランジュは別の出口のほうえ







THE PRIVATE AFFAIRS OF BEL AMI

ベラミ事件（ユナイテッド・アーチスツ映畫）

（INS特信）

[illegible]の数多い小説のなかで、最もがその代表作とあげるに躊躇しないであろう、彼の傑作「ベラミ」の映畫化であることはいうまでもない。この小説の映畫化はこれが最初ではなく、數年前、ドイツでもウィリ・フォルストがとりあげたことがあつた。

今度の映畫化はもとMGMの共同製作者として「大地」や「支那海」に名前をつらね、戰爭中から、サマセット・モオムの「月と六ペンス」オスカア・ワイルドの「ドリアン・グレイの畫像」など專ら文藝映畫大作專門監督で賣りだしたアルバアト・リュインの製作監督で、主演は前二作と同樣、「謎の下宿人」のジョオジ・サンダアスである。

即ち、彼をとりまく多くの婦人たちから、「美貌（ベラミ）の友」と呼ばれるジョルジュ・デュロにサンダアスが扮し、彼をめぐるラブ・アフェアが相ついてくりひろげられるわけである。但し、モオパァサン的男女關係をそのまま映畫化することは檢閲關係からみてむづかしいので、人妻が未亡人となつているなど、いろいろな改變がなされている。

[illegible]よい助演者[illegible]スパリイはじめ、アン・ドヴォ[illegible]ランセス・ダイ、マリイ・ウィルスン、キャサリン・エメリイたちが、また男側は、ジョン・キャラディン、アルバアト・バッサアアン、ウォーレン・ウィリアムなど渋いしつかりした人たちが共演している。

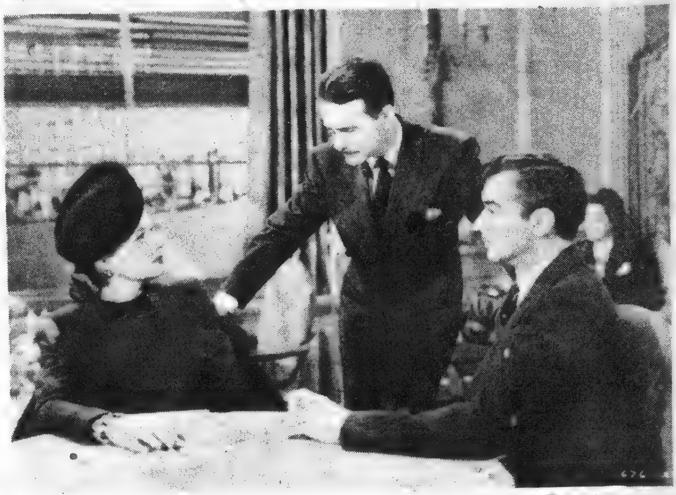
脚本はリュウイン自ら執筆しているが、撮影は、最近「凱旋門」をとつたラッセル・メティが擔當し、音樂はフランスの巨匠で映畫の方でもデュヴィヴィエの「幻の馬車」その他を手がけているダリウス・ミロオが自ら作曲・指揮に當つていることが大いに注目される。

このリュウィンの文藝映畫化は彼自身の文藝映畫の所信にもとづいて原作の文學性を適度に映畫的に變改しているが、それについては成功しているといわれているが、サンダアスのベラミはいささか原作に忠實すぎたということである。三月七日封切。上映時間、一時間五十二分。









（ＩＮＳ特信）

不實な女（ウォナア映畫）

戰爭に夫を送つたあとの孤閨の淋しさからふと踏みまよつた女が、夫の歸還とともに來ろべき審判の前に立つ――。戰爭中に必ず起ろべき問題を眞向からとりあげたものとしてこのウォナァ映畫は注目されている。

アン・シェリダンは夫のザカリイ・スカットの出征中ふとしたことから彫刻家のポオル・ブラッドレイと交渉をもつが、夫の歸還とともにその交りを精算し、すべてをかくそうとするが、男は關係を明るみに出すというので、思い餘つて殺してしまう。男の妻のマアタ・メトロヴィチは友人の畫商スティヴン・ゲレイと共謀してシェリダンに恐迫狀をおくる。彼女は愛する夫にかくして何とか事の解決をはかろうとするが、結局、事件は明るみに出てしまい、新聞種となる一方裁判沙汰になつてしまう。そこで顧問辯護士のルウ・エヤアズの登場となり、彼の盡力により事件は解決する。しかし、この事件で夫婦間に溝ができ、二人は離婚しようとするが、エイヤアスとイーヴ・アーデンの說得で二人は愛情をとりもどすことができた。

話はかなりメロドラマ調に終始しているようであるが、戰いに夫を送つた妻にとつて孤閨は配給の砂糖が減らされると同じような苦しい禁斷症狀であるとさえいわれており、アメリカでは一つの社會問題とさえなつているようであるから、ウォナアが眞向からこの問題をとりあげたことが注目されているのは當然であろう。かつまた、この主題は戰後の映畫でもはじめて扱われているのである。

製作はジェリイ・ウォルド、監督はまだ日本には知られていない「ミスタア・スケフィントン」や「支柱臺」などをつくつたヴィンセント・シャアマン。主演者アン・シェリダンは「嵐の靑春」で、ザカリ・スカットは「南部の人」ですでに知られているが、ルウ・エャアズは、古くは「西部戰線異狀なし」から「素晴しき休日」に至るまで古いファンには馴染みの多かつた人で最近は傍役にまわつて好演技をみせているが、この映畫でも一ばん光つているらしい。イーヴ・アーデンは昨年、音樂映畫「夜と晝」でよい傍役ぶりで好評を博したが、本映畫でも評判がよいようである。

七月五日封切、上映時間一時間四十九分。





ア[illegible]・ワイルドと、「ノオトルダムの傴僂男」「船乗りシムバッド」のモオリン・オハラが共演している。この二人は當時ほとんど天然色映畫ばかりに出演しているが、いづれもコスチュウム・プレイがおおく、それを現代ものの天然色版に共演させたところがミソといえるようである。

コオネル・ワイルドは競馬狂で、新婚の妻モオリン・オハラは何とかして彼を正道に戻らせようとするが、ワイルドは女友達のヘレン・ウォーカアから金をひつぱり出しては馬券買いで餘念がない。ワイルドとウォーカアは戀人という間柄でもないのだが至極氣安い古い友達として人前で平氣でキスもする次第でモオリンはこれを誤解して二人の仲が次第におもしろくなくなる……という風に話がすすみ、もめ事のすえ終りがハッピイ・エンドと常石どうりの筋で、映畫のねらいは話そのものよりも、むしろ、イギリス、南米、アメリカと三つの國の三様の大競馬場風景をテクニカラアでみせるところにあるようである。

グレン・ランガン、ジェイムス・グリイスン、ヘンリイ・スティヴンスン、マアガレット・バナアマン等が共演し、ヴェチラン・ライタア、ワンダ・タショックの書卸し脚本を「銀嶺セレナーデ」のH・ブルウス・ハムバアストンが監督、ロバアト・バスラアが製作した作品である。四月封切。

ジョオン・フォンティン　（[illegible]）

★一九一七年十月二十二日東京に生る。姉さんのオリヴィア・デ・ハヴィランド[illegible]一つちがいである。[illegible]離婚して渡米したので彼女もアメリカで育つた。十五才のとき[illegible]に行き二年間在京して、この間、[illegible]のアメリカン・スクウルにかよつたりしていた。その後カリフォルニアの家に歸つてから、かねて好きだつた芝居の方に熱心になり[illegible]の舞臺に立ち「[illegible]」に出演し[illegible]に認められた（一九三五年）

★この年映畫演技をまなぼうと、ジョオン・クロフォードの「レディはたくさん」にちよいとした役をもらつて出た。そして、[illegible]した彼女の名を名乗つてジョオン・フォンテインと[illegible]、その後[illegible]映畫の端役からプロデュサアのジェシイ・ラスキイに認められて契約、[illegible]となつた。日本に來たものでは「[illegible]の女」がその頃の作品である。そして「踊る騎士」ではフレッド・アステイアと共演するまでに至つたが、この映畫では彼女の踊りはアステアの相手役としては未熟で不評判であつた。「風と共に去りぬ」のスカアレット・オハラの候補者にもなつたがものにならずくさつていたが、デヴィッド・セルズニックに抜擢された「レベッカ」に出演して、一躍名聲を博し「斷崖」ではついにアカデミイ賞をさらつてしまつた。

★以來「永遠の處女」「ジェーン・エア」「フランス人の入江」「[illegible]」等と出演、最近では「アイヴィ」で心邪まな女性に扮し注目をあびている。

★ブライアン・エハアンを姉のオリヴィアと爭つて獲得し結婚したが一九四四年離婚、現在はプロデュサアのウィリアム・ドジャア夫人である。五呎四吋、一〇八封度。金髪ではしばみ色の眼のもちぬし。一ばんすきなのはお料理で、これは大へんな自信をもつている。[illegible]スポオツと讀書がそれにつぐ御趣味である。

★姉さんのオリヴィアと仲のわるいことは有名なはなしである。



IT HAPPENED ON 5TH AVENUE

INS特信

五番街の出來事

（アライド・アーティスツ映畫）

アライド。アーティスツは新しく組織されたプロダクションで、もとワアナア、MGM、世紀フォックスにあつて「踊るニュウヨオク」「陽氣な街」「天晴れ着陸」等輕快な映畫を得意としていたロイ・デル・ルウスが製作者及び監督に當つた。ふるくは「晩春」「永遠に愛せよ」で端正なプロフィルとエモオショナルな演技で名聲をうたわれた舞臺の名女優アン・ハアディングと、これもなつかしいチャアルス・ラッグルスを中心に、若手の青年役としてこの頃人氣のでてきたドン・デフォーや、ゲイル・ストオムはじめ、ヴィクタア・ムウア、グラント・ミッチェル、エドワアド・ブロフイなどが共演している。

アン・ハアディング、チャアルス・ラッグルス夫妻はニュウ・ヨオクの五番街に住居を構えた富豪で、二人は夫婦仲がうまくゆかず離婚しようとしている。五番街といえばアメリカでも最高の富豪街なのだが、そこに漂然と現われた風變りな放浪者のヴィクタア・ムウアが、避寒地に一家が出かけてゐる留守にこの家に入りこんでしまう。そして、自ら金もち氣どりで留守中の主人の着物を着たり御滿悅の態であるが、たまたま知り合つた復員してみたら住居がないというドン・デフォーを自分の養子としてこの家に住まわせてやる。そこに學校からにげ出してきた、ラッグルスの娘のゲイル・ストオムが歸つてき、またラッグルスとアン・ハアディングもかえつてきて、この留守中の有さまに大さわぎとなる。しかし結局、ムウアの人柄のよさとユウモアと、ドン・デフォーとゲイル・ストオムが戀仲になつて、萬事めでたく解決するというストオリイである。



結局この映畫では、アメリカでもいま大きな問題となつている住宅問題がユウモラスに扱われていることと、「明日は來らず」で名演技をみせたヴィクタア・ムウアが非常によく映畫の中心人物としてすべてをさらつていることが、この映畫の好評の原因であり、ロイ・デル・ルウスの演出もなかなか微笑ましいタッチをもつているらしい。原作はハアバアト。クライド・リュイスとフレデリック・ステファニの共作で、古くパラマウントのヴェテランマンが脚色し、エヴァレット・フリイマンとして知名なヘンリイ・シャアプが撮影を擔當している。また、ハリイ・レヴェルとパヴル・ウエブスタア共作の歌曲をいくつかゲイル・ストームが歌つている。

なお、このアライド・アーティスツの映畫はモーグラムを通じて發賣され、この四月に封切られた。上映時間　一時間四十三分。

THE HOMESTELCH

INS特信

ホームストレッチ

（二十世紀フォックス映畫）

ホームストレッチというのはトラックのゴール・ラインのある側の直線コオスのことを言ふ。つまりこの題からいつてもトラックに關係があることが想像されるが、これは二十世紀フォックス製作になるテクニカラアの競



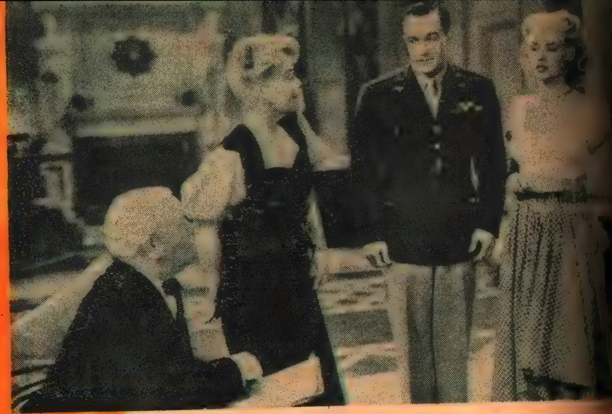


わが行くてや楽し

新井 三邦

Living in a Big Way

（INS特信）





その上、彼女には自分が離婚したら後釜をねらうスチュアート・シムス（ジョン・ウォバアートン）の存在を知り、一層戰闘意識が旺盛になつた。彼はモオガン家の召使たちにデモクラシイに目ざめよと說いてま

……かけ、その方の事業も失敗させ、レオはモオガン家に精神異常者だと思われ追いだされそうになつた。

マアゴットはこの時になつて理想主義者としてのこの青年の美點を認めるとともに眠つていた彼への愛情が目ざめてくるのを感じた彼と會つた時、すぐ結婚しようと考えたのもお先き走りの愛國心の發露と考え

こうなるとあとは一しや千里、レオびいきのおばあさんの後ろだても大いに物をいつて彼等の理想の生活えの第一歩を明るくふみ出すこととなつた。

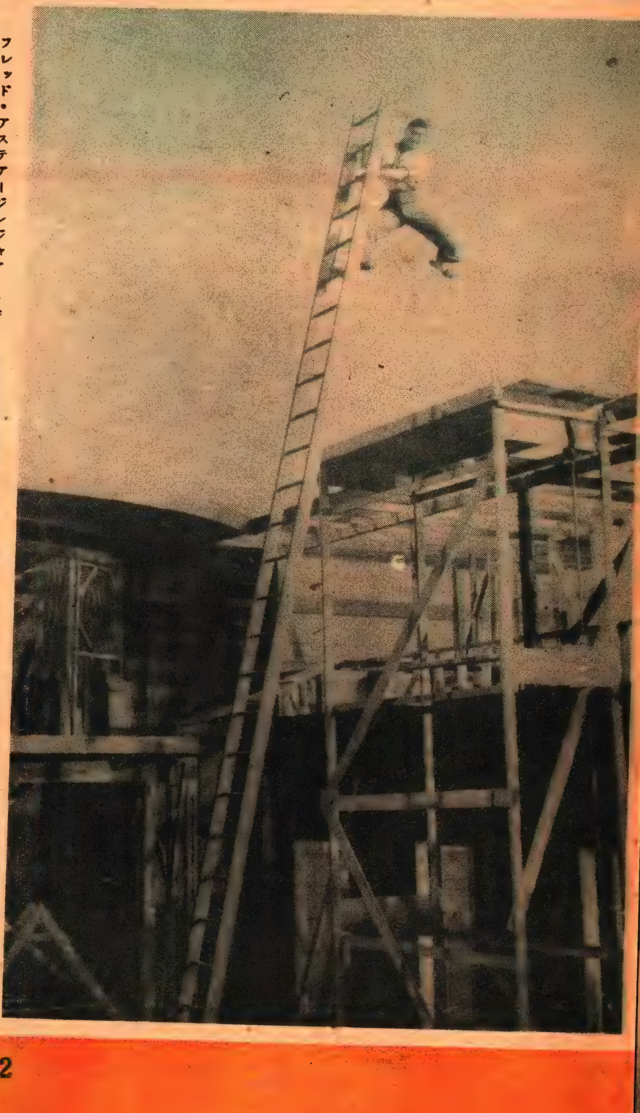


フレッド・アステア＝ジンジャア・ロジャアス共演の音樂映畫をはじめRKOで多數の作品をのこして現在MGMのプロデュウサアとなつているパンドロ・S・バァマンの製作になる音樂映畫で「ステージ・ドア」のグレゴリイ・ラキャヴァがしばらくぶりで監督に當つた音樂喜劇で、ストオリイもラ・キャヴァ自身の書きおろしたものである。

主演は「クリスマス休暇」のジイン・ケリイと新進のメリイ・マクドナルド。ジイン・ケリイはもともとアステアのあとをつぐべきタップの名手で踊らぬ「クリスマスの休暇」の彼は異例と稱すべきもので、このような音樂喜劇が本領である。助演は「美人劇場」で達者な演技をみせたチャアルス・ウィニンジャア、をはじめ、陽氣な小母さん役が獨壇上のスプリング・バイントンをはじめ、フィリス・サクスタア、ジイン・アディア、カァル・サンドバァグ、ジョン・ワァバアトン等である。今年の六月封切作品で、上映時間は一時間四十三分。

あらすじ

レオ・ゴガティ（ジイン・ケリイ）とマアゴット・モオガン（マリイ・マクドナルド）のロマンスのそもそものはじまりは戦



役兵酒保の刺激的な雰圍氣のなかで生まれたものだつた。二人はお互いに一目惚れという次第で初對面二時間後にはもう結婚の約束までしてしまうという意氣投合ぶりであつた。

當然二人が敎會で型どうりの結婚式をあげることになつたわけだが、彼は花嫁と數分共にいただけで突然現われたMPにこの式を中斷されて、何が何やらわからぬまま船上の人となつてしまつた。軍人たる彼が出動を命ぜられたことが、その時になつてのみこめたのである。

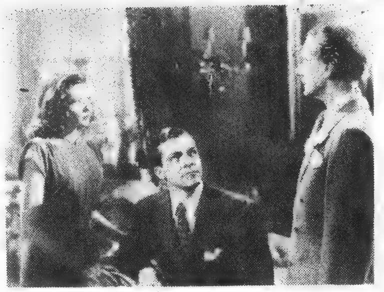
レオが去つてからマアゴットは冷靜に自分のことを考えてみると、どうやらこの結婚が愛情よりもお先き走りの愛國的熱情の結果らしいと氣がついた。彼女がレオ宛にまづ書いた手紙は離婚してほしいということだつた。ところが、レオは轉々と任地がかわつていたので、彼に手紙が着いたのは終戰になつてからのことで、それまでそんなこととは夢にも知らず、ひたすら自分の復員の日を待つてくれる妻と會える日の樂しさに胸をふくらましていたレオは、まづ受けとつたその手紙を一讀するやたちまち憤慨したのも無理はない。彼は自分が滿期除隊になるまで離婚が成立しないことを知つて[illegible]

したら、マアゴットの愛情を本當につかまえてやる。ぼくがどんなに才能をもつているか彼女にみせてやろう――と。

歸國するや、まつさきにマアゴットの家にとんでいつたレオは彼女の家が素晴しく立派なのに仰天した。そこで彼は考える。多分マアゴットはこのお屋敷の秘書でもやつてるんだろうと。しかし、まさしく彼女はこの軍需工業成金の大實業家の娘であることをたしかめていささかたじろがないでもなかつた。ここで腰がくだけては萬事休すと、レオは勇敢にマアゴットとに要求をつきつけた。一つ結婚生活をつづけて彼女を再敎育する、一つ夫としての權利を認めよ…云々。

決意は要求だけに止まらず、實行にうつさねば意味をなさない。レオは　マアゴットの拒絶を無視してこの大邸宅に居すわり彼女の兩親（チャアルス・ウイニンジャアとスプリング・バイントン）とも會談に及んだ。その上、思いがけぬ味方を發見した。というのはマアゴットのおばあさん（ジィン・アディア）が大いに彼を認めてくれたからである。一方、始終ピントのくるつた言動をする有難からざる存在の執事エヴァレット（カァル・サンドバァグ）がいる。







美　人　劇　場

きれいなレヴィウ場面は，それだけでたのしく見れるものだが，やはり映畫の筋立てや描きかたが，適當にしっかりしていないと，退屈する。なにしろこれは，世界に名高いジイグアエルド・フオリイズの內幕をかいたものであるから，實寫的(？)の興味はあるが，まえに「巨星ジイグフエルド」でおなじ監督者（ロバアト・Z・レオナアド）が，趣向のありったけを出してしまっているので，出がらしの觀がある。ジュデイ・ガアランド，ヘデイ・ラマア，レエナ・タアナアの三女優のうちでは，個性のつよいタアナアが一番の魅力。ガアランドは，歌をきかせれば，随一である。ヘデイ・ラマアは，ただ美人というだけ。あるいは，この人，天然色向じ，スタアになっているのかも知れない。

豪華なレヴィウ・シインも，一部既成品を流用していたようだ。意外に安上りな作品だろう。

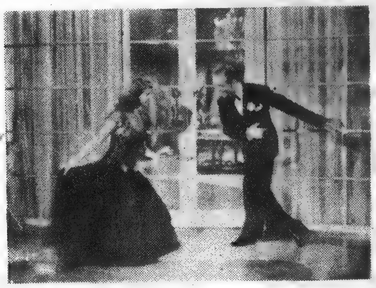
ローラ殺人事件

探偵映畫として一風變つた味のある映畫である。ヒッチコックの「疑惑の影」や「斷崖」で味わつたスリラー味を求めようとすると失望するであろうが，ヴェラ・キャスパリイという女流探偵作家の原作を適宜にアレンヂした監督オットー・プレミンガーの才氣は買つてやらねばなるまい。

フオックス社賣出しスターのヂーン・テイアニイの演技の眞價はこの映畫ではまだ分らない。殺人罪を犯す作家に扮するクリフトン・ウエブという舞臺俳優が一癖ある演技を示す。またダナ・アンドリウスといふ新人が力の入つた演技で好感を與える。筋そのものは平凡だが，アメリカ映畫のヴァラエテイを知るうえで一見するのも面白い。

世　界　の　母

看護婦と云えばナイチンゲールしか知らぬ人は見なければいけない。アメリカの誇りであるエリザベス・ケニイを知ることは一つの敎養である。そう云う意味で此れは立派な存在價値を持つが劇映畫としては「驛馬車」や「男の敵」の名脚色者ダドリイ・ニコルスにしても此の地味な傳記は困難な業であつたと思う。ことにニコルスが監督者であり製作者であると云うことが更に彼を固くしているかのようである。眞面目さには脱帽するが涙をあふらせる盛り上がりに缺けている。それはロザリンド・ラッセルがケニイになるよりもアクトレスにならんとした努力が目立つからかも知れない。







晴れて今宵は

久しぶりのアステアだし，リタ・ヘイワアス賣出し時代の姿がみられるので大いに期待していたが，がつかりさせられた。

ミユウジカルという奴は，相當にゴオジアスな雰圍氣をつくつてかゝらないと工合がわるい。その點で，この映畫は，如何にも安あがりの印象がのこされて困る。ストオリイは惡くないが，場面（背景）の變化工夫に乏しく，眼さきが變らないので，いつこうに今宵が晴れない。ザビエ・クガア先生が彩りに特別出演しているが御愛嬌の程度であり，踊りは，肝心のアステアとヘイワアスのデュエットが，ヘイワアスの下手さと肉體的條件不利で全く詰らず，たゞ，事務所におけりアステアのソロがよいだけである。

四　人　の　息　子

イングリッド・バアグマンとしてはごく初期に屬する映畫だ(一九四一年作品)。しかし，このバアグマンは立派である。スウザン・ヘイワアドと初對面でたちまちこの女の正體をみぬいてしまうまなざしにこもつた直觀的なひらめきを出したあたりのうまさ。ただし，なんとなく計算しながらやつているお芝居だ，という氣がしないでもないが，グレゴリイ・ラトフの演出が大體そういうやりかただから仕方がない。ラトフの古色ソーゼンとした演出のなかでもなお光茫をはなつている。脚本もその點お粗末で，カンジンの四人の息子がさつぱりはえず，結局，バアグマンと，ずい分年をとつたがそれだけ味の出たウオナア・バクスタアがいなかつたらほとんど取柄があるまい。よつてこの採點はお二人に獻上する次第である。

再　會

女市長（アイリイン・ダン）が，人なみに戀をする，というはなし。相手の男は，シャルル・ボワイエである。ダンとボワイエなら，もっと複雜な心理的な喜劇でも，成功するはずである。この程度の，シチュエイションだけでわからせる喜劇につかうのは，もったいない。

これは決してまずい出來の映畫ではない。わらわせる手際はまことに用意周到なものである。しかし，いかにも，調子がひくい。おわりの方で，ダンとボワイエを一緒にするために，子供二人の戀心をダシにつかうが，これなどは，[illegible]の最たるものである。チャアルズ・ヴィダアの監督は，そつなくシナリオどおりにしあげている點では，一本の監督だとも いえるが，自分の味はまだもっていない。シインでいいのは，ダンがボワイエにはじめて會うあたりである。







青　春　の　宿

みにくい顏の爲めに，ひしがれた者同志が美しい戀をし，お互いだけの美しい世界に這入れたと云う此の物語の，みにくい顏のいぢらしい女をドロシイ・マクガイアと監督のクロムウエルは相當打ちこんでやりとげてゐる。兵隊慰安會の夜の場面は見事である。しかし，美しい世界に二人だけのパラダイスを見つけた，あゝよかつたと云う嬉しさ（觀客）が案外きいてこないのは男（ロバート・ヤング）に內面的なもつと激しい變化が演じこなしきれなかつたのか。デュヴイヴイエの「肉體の幻想」の第一話の假面のお話しが「青春の宿」のロマンチック・フアンタジイをすでに唯の二巻で喰つてしまつた。

謎　の　下　宿　人

ベロク・ラウンデスの「下宿人」は彼女の代表作だが，戰前に一讀して仲々面白かつたと記憶する。この映畫化では，探偵小說的興味は殆んど排除し（といつても原作もスリラアで本格物ではないが，謎めいた扱いはある）最初から犯人を明らかにして，彼によるヒロインの危機の切迫にスリルの焦點をおいている。明治的ロンドンの描寫にも色いろ凝つており，仲々努力されているが，やはり演出力不足で，肝心の線が一本足りない。レアード・クリガアは巨大な肉體の效果を生かしているが，マアル・オベロンは平凡の二字につきる。ジョオジ・サンダアスの探偵は感じである。

我が道は遠けれど

クリスチャンの觀客はこの映畫にずい分感激したらしい。評者は單なるクリスチャニズムにたいする興味をもつていた程度にしかすぎないので，むしろ，この作品にあつかわれている牧師が敎會をたてるまでの權謀術策がじつに奇妙な感じがした。「わが道を往く」のように明るく素直に感ずることができなかつた次第である。それにしても，この脚本は原作には忠實なのであろうが焦點がぼやけている。その點アーヴィング・ラパアも監督ぶりも局部的な力のいれかたで，つねに中心を堂々めぐりしていて，一貫した迫力がない。俳優も[illegible]り。ただ一つの興味は，フレドリック・マアチ父子が活動寫眞物にいつてウィリアム・S・ハートをみる件りで，わすれられたサイレント映畫初期の息吹きを生き生きと傳えてくれたところで，これが思いがけぬそして最大の收穫である。

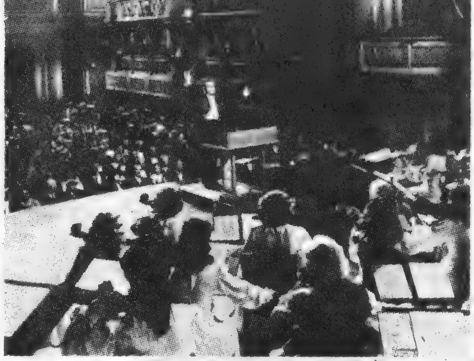
封切映畫短評

♧の半分が
♣になります

ベスト・パアフォマンセス

1 イングリッド・バアグマン
2 ジョオン・フォンティン
3 ロナルド・コールマン
4 ジョセフ・コットン
5 シャルル・ボアイエ

百萬人の音樂 ♧♧♧♧♣



おなじ音樂映畫でも,「アメリカ交響樂」などよりは,映畫的にずっとよくできているし,作品のあたえる感銘も,しっとりしていて氣もちがいい。フランツイスカ・ガアルやディアナ・ダアビンのたのしい映畫をつくっていたヘンリイ・コスタアの趣味がよくでている。センチメンタルな氣もちのよさが,その持味である。マアガレット・オブライエンのつかいかたなど,まことに堂にいったものである。

いろんな名曲を,ピアノの名手ホセ・イトゥルビがひく。ラリ・アドラァが,ドビュッシイをハモニカでふく。ジミイ・デスランティが,やはりふざけている。だが,みんな,いい調子に映畫のなかにとけこんでいる。ジュン・アリスンの個性も,そうした雰圍氣にあっていた。大作ではないが,感じのいい,調和のとれた佳作である。

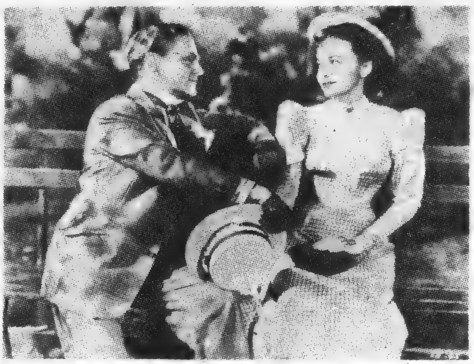
心の旅路 ♧♧♧♧



久しぶりに見る情緒ゆたかなロマンチック映畫の佳作である。前大戰で記憶を喪失した主人公の數奇ある運命をえがいたジェームス・ヒルトンの原作のもつ雰圍氣を,主人公に扮するロナルド・コールマンの好演技とジョゼフ・ルッテンバーグのすばらしい撮影にたすけられて,監督マーヴィン・ルロイは相當立派に出している。

グリーア・ガースンも惡くはない。だが,原作でもそうであるとおり,物語のもつ性質上,彼女の扮する役割が性格的に完全に描くことが出來ないため,映畫でも彼女はまた非常に損をしている。この映畫は開卷すべり出しが上出來であるから,ぜひとも最初から見なければならない。

いちごブロンド ♧♧♧♧



ジェイムス・キャグニイがじつに久しぶりでよいパアスナリチィを存分に發揮していること,ラウォール・ウォルシュがグッド・オールド・デイズの氣分にぴつたりとした演出をみせていること。下町のきっぷがこんなにいきいきとえがかれているのも最近の作品ではめづらしいぐらいである。俳優の個性を生かすためにつくられた映畫もここまでそつがなくつくられれば充分一級品たりうることを證しているものだ。もつとも脚本もよいが,ウォルシュの小股のきれがあつたイキがずい分ものをいつている。ふるい音樂のつかいかた,街の情景のつかみかた,その細部によい味がしみわたつている。これが十四年前クウパアの主演した「ある日曜日の午後」と同じ原作とは考えられまい。そこにこの作品たちの才能がすぐれていることをもの語つている。







ジエーン・エア ♧♧♧

少女時代がキャメラ(ジョージ・バーンズ)も役者(ペギイ・アン・ガーナー)もクラシツクを匂はせて見事であるが,物語が本筋にはいるとオーソン・ウエルズの魅力が全卷をさらつてしまう。巧いと云うだけでなく,不思議な魅力である。ミス・キャストなのかぴつたりした役なのか,そんな事よりもオーソン・ウエルズ自身が引きつけてゆく。イギリスの監督や作家が起用されて雰圍氣に力を注いでゐる大作であるが,シヤアロット・ブロンテの長篇を愛讀した人にはもつと何か時代の空氣がほしいと思うだらう。何にも知らぬ人は此のロマンスに充分酔えるだらう。

スキング・ホテル ♧♧♧

クロスビイ=アステアのコムビにアーヴィング・バアリンの音樂ときたら正に鬼に金棒,いかなる傑作が生れたかと胸をとゞろかせていたのが誤算で,祝祭日にちなんだ新曲舊曲をずらりと並べただけが味噌。クロスビイの唄,アステアの踊り,御兩人の絡み,と,個々の場面には流石に樂しさがみなぎつているが,全體としてみると,セットその他がいささか貧弱な上に,脚本の趣向が陳腐で,途中からもたれてしまう,七面鳥が暦の上をすこしゆつくり歩きすぎるのである。

マジョリイ・レイノルヅとヴァーヂニア・デイルは,リタ・ヘイウァスと共に,ジンジャアの後にジンジャアなしの嘆を新たにさせるにとゞまる。

ブルックリン横町 ♧♧♧

舞臺演出家として名のあるエリア・カザンがブルックリンに住む貧しい家庭をえがいたベティ・スミスの原作「ブルックリンに一本の樹は育つ」にもとづいて作つた第一回監督作品である。第一にドロシイ・マックガイヤの演技が非常にすぐれていることを賞めねばなるまい。第二にペギイ・アン・ガーナーという子役の使い方がうまいこと,其他の傍役に對しても演出上の注意がよく行屆いていて,演出自身はやゝ生硬であるが,その生硬さが逆に印象に殘るものを與え,いろいろな點で興味がある一方,貧しい人々の生活描寫にも相當の成功をみせている。

地味な映畫を好む映畫ファン,映畫技巧を研究する人には見逃がせぬ作品である。

「に御迷惑をおかけ申しては……」
乙女は頬を染めながら口ごもつた。
「なんの。虎の威をかる狐ども。たまには懲らしたほうがよい。して、あなたは？」
「はい、旅籠ロサリオ亭の召使カタァナ・ペレスと申します。」
「カタァナとはあなたにふさわしいよい名だ。カスティリヤ語では劍の意。戀の刄で男の心臓を貫こうというわけか」乙女は絶え入らんばかりの風情で面をふせた。若者は、いとしげにみやり、「急に喉がかわいた。自慢の葡萄酒など振舞つて頂こうか。」
乙女の匂いか花の香かかぐわしいそよ風が若者の頬をなぶつた。
若者の名はペドロ・デ・バルガスといつた。その日、彼は思いもかけぬ冒険に出會つての歸るさだつた。ハエンの町を見おろす丘に遠乗りに出た彼は、邪まな權力をふるうディエゴ・デ・サリバの一行に出會つた。デ・サリバは、虐待にたえかねて逃亡した奴隷コアトルを追つているところだつたので、ペドロにもこの追跡に加わる様に懇望した。やむなく引受けたペドロは、一行と別に海岸への道をたどつて、コアトルの姿を求めた。が、奴隷の姿は容易に見當らず、探しあぐれたペドロは、泉のほとりに馬をとゞめ、水を掬ほうとした。その刹那、隼の様な一つの影が、背後から飛びかゝつた。キラリとひらめく短劍の刄先を、辛くもかわしたペドロは、苦もなく相手を抑えつけた。それがコアトルだつた。コアトルは必死になば、非はデ・サリバにあつた。ペドロは、海へ逃げよと敎えて、彼を放してやつた。その途すがら、神はカタァナとの奇しき邂逅を策したまうたのだ。
ロサリオ亭の亭主サンチョ・ロペスは大よろこびでペドロを迎えた。丁度、二人の男が店の一角にとぐろをまいていた。一人はエルナン・ソレルという、ゆくゆくはカタァナと一緒になるものと噂されている若者、他の一人は、見るからに一癖ありげな屈强な男で、名をファン・ガルシアと名乘つた。
「うむ。ところでお主、メヒコという新らしい國のことは御存じかな。クゥバの東に横たわる大きな土地だ。われらが夢にも求めてやまぬ黄金塊（エル・ドラドオ）だ。家々の柱や壁は黄金で張りめぐらされ、床も黄金をしきつめてあるという。行つてみたいとは思わぬか。」
ペドロは、ガルシアの言葉に耳をかたむけていたが、先刻から彼が自分では一度も盃に唇をふれないのに氣付いた。彼は、話の切れ目に、その理由をきいてみた。
「理由などと、他愛もないことさ。儂は飲めば醉う。醉えば氣が荒くなる。氣が荒くなれば見境がつかなくなる。擧句の果は刄傷沙汰というわけでな。もう人殺しはこりごり、酒も懲りごりといつたところさ。」
そう語るガルシアの頬をよくみれば、鼻はつけ鼻、鬚もつけ鬚であつた。彼の首には賞金がかけられていたのである。

二、恐怖の魔手

いう男と、すつかりウマが合つたというわけなんだれ？」
ドン・フランシスコが、笑いながら云つた。
「まあ厭やですよ貴方。息子がそんなお尋ね者と仲よしになるなんて。」
傍のドニャ・マリアが眉をひそめた。
「よろしいではありませんの。お兄様冒険がお好きなんですもの」
メルセデスが父親に加勢した。
ペドロは兩親と妹の會話を、微笑しながら眺めていた。樂しいデ・バルガス家の晩餐である。と、一人の召使が入つて來て、來客を告げた。その名をきいたとき、いままで賑やかだつた食卓が急に死の様な沈默に包まれてしまつた。入つて來たのはディエゴ・デ・サリバだつた。
「通りすがりにちよつと立寄つたのじやが、ペドロ殿、今日の奴隷狩りには意外の御迷惑をおかけ申したな。あの土人奴、誰かに援けられてまんまと逃げおうせましたわい。おう、それそれ、うちの若い者どもが、色いろと世話になつたそうな。そのお禮も申し上げずばなるまいて。」
デ・サリバは皮肉な調子でそういうと、じろりとペドロの顔をみた。
「いや、デ・サリバ殿。今日は倅めがなにか御無禮をはたらきました由、血氣にはやる若者のこと、何卒御容赦を。」
おどおどと詫びをいれるドン・フランシスコを尻眼にみて、
「儂が異端審問所の最高法官なのは御存じじやろうな。この舌一枚



びきも思うまゝじや。」
と云いすてるなり、デ・サリバは發音も荒く去つて行つた。
「ふん、きいたふうな威し文句だ。お父様もお母様も、心配なさることはありませんよ。あいつのおか
とドニャ・ルイサのところへ行つて参ります。」
ドニャ・ルイサは、ドン・フランシスコの親友デ・カルバハル侯の愛娘だつた。その濃艶な美しさは、ハエンの若い騎士たちの憧れ

黄金の都

—スペイン俠血録—

Captain from Castile

堀井有人

（ＩＮＳ特信）



解説

一九四四年に出版されて以來發行部數一二五萬部という危大な賣行きをしめしたサミユエル・シエラベルジヤアの歴史小說「カステイルから來た大尉」二十世紀フオツクスを映畫化した、今年度の大作のひとつで總天然色の時代劇である。

封建的色彩のつよい十六世紀のスペインとその當時、新大陸としてまだ耳新しいアメリカ大陸のキユウバ、メキシコを舞臺に、義俠と勇智に富む一青年の戀と波らんの物語りである。この青年の活躍舞臺は、歴史にも有名なエルナン・コルテスの中南米劇弱があつかわれており、色とりどりの甲冑や、スペイン 中南米の風物がテクニカラアの畫面に美しくくりひろげられるわけである。

主演は、「剃刀の刃」につぐタイロン・パワアで、新人のジイン・ピイタアスが共演。ジヨン・サトン、リイ・J・コブ、アントニオ・モレノ、アラン・モオプレイ、セザル・ロメロなどが共演。監督は「世紀の楽園」「スタンレイ探険記」「追憶」「ベルナテツトの唄」「ウイルスン」「アダノの鐘」等をつくつた巨匠ヘンリイ・キングである。なお、この物語りは氣分を重じて個有名詞は全部スペインよみにした。

配役

ペドロ・デ・バルガス…タイロン・パワア
デイエゴ・デ・サリバ……ジヨン・サトン
コアトル……ジエイ・シルヴアヒールス・スミス
カタナ・ペレス……ジイン・ピイタアス
エルナン・ソレル……フレツド・リビイ
フワン・ガルシア……リイ・J・コブ
ドン・フランシスコ…アントニオ・モリノ
サンチヨ・ロペス…クリスピン・マアテイン
ドニア・マリア…ヴアージニア・ズリサツク
メルセデス……ドリイ・アルリアガ
マヌエル……ロバアト・カアンズ
セバスチヤン・レイエス…ボブ・アドラア
ボリテヨ……アラン・モオプレイ
エルナン・コルテス……セザル・ロメロ
バルトロメ論父……タマス・ゴメス
サンドバル大尉……ヘリイ・カアタア
アルバラド大尉……ロイ・ロバアツ
フアン・エスクデロ…コリイド・ヘドリイ
デイエゴ・セルメノ…ジヨン・ロウレンツ
ドナ・マリナ……ステリア・インダ

スペインの巻

一、スペインの春

一五一八年——。スペインの春は、アンダルシアの山河を、やわらかな霞の薄衣に包んでいた。ハエンの町の外れ、花匂う野邊を、樂しげに戀唄を口づさみながら駒をすゝめる一人の若者。色はあくまで白く、秀麗な眉目と凛々しい物腰には、家柄のよさが自らあらわれていた。

若者は、ふと戀唄をやめて、耳をすました。若い女の悲鳴がきこえて來たのだ。若者は馬に一鞭あてると、聲の方向に急いだ。貴族の紳士と覺しい荒くれ男數名がわいわいはやしたてるなかで、犬に奪われたティプルの掛布を取戻そうと、一人の乙女が必死になつていた。その有様をみるなり、若者は、手にした鞭でしたたかに犬をなぐりつけ、馬首をかえすや物も云わず、荒くれ男どもを前後左右になぎ仆した。

「畜生！ バルガスの小せがれだな。どうするか覺えていろ！」

捨てぜりふを殘して、蜘蛛の子を散らす様に逃げ去る男たちを微笑で見送つた若者は、氣付いた様に、乙女をふりかえつた。年のころは十七、八か。鄙には稀な美しさ。若者は思わずうつとりと、その黑耀石の瞳に眺め入つた。

「危いところを有難う存じます。でも、わしは[illegible]



ンの春は未だ浅いというに、このメキシコの砂濱は、焼けたゞれる様な暑さだつた。威風堂々上陸したコルテスの前には、敷かれた毛布がみえなくなるほど、夥しい金銀寶石が積み重ねられた。その財寶の前にはアステク族の使者數名と從者たちが居並び、彼等とコルテスの間には、金銀寶石も光を失うばかりの美しさにかゞやく土人娘ドナ・マリナが、通譯として立つていた。
「使者たちは、贈物をお受けいただいたからは、この土地にお入りにならず、お引取りれがいたい、と申しております」
「なにを愚かなことを」と、コルテスは嘲りを笑をうかべてこたえた。
「こゝにある黄金の何千倍何萬倍があるというに、このまゝ歸れると思うのか。」
一夜、カタアナはポテリヤの食事の面倒をみながら、ペドロへの愛が達せられるものかどうか。星占いをしてくれと頼んだ。「容易なことじやあるまい。が、これを進ぜよう。このふさなロケットの中には、數々の呪文が秘められて居るのじや。」
ポテリヤは、小さなロケットのついた指輪をカタァナの指にはめてやつた。
その指輪の利き目は忽ち現れた。二、三日後の或る夜、宿營に倦んだ兵士たちは、篝火をかこんで故郷の歌をたのしんでいた。
「そうだ。カタァナに踊らせろ！」
一人が叫んだ。
「それがいゝ。カタァナ！踊つてくれ！」
「ザラバンダだ！　サラバンダを踊れ！」
カタァナは、一同のつくつた圓陣のなかに現れた。ゆらめく火影に、その黒い瞳が、南國の夜空にきらめく星の様に光つていた。
「でも、誰か相手をしてくれなきや。」
「よし！」
一人の兵士がすゝみ出た。ペドロだつた。音樂がはじまつた。二人は、多くの兵士たちのはやしたてる聲も耳に入らない様に、踊つて踊りぬいた。曲が終つたとき、ペドロはいきなり彼女の唇に自分の唇を押しつけた。
「カタァナ。お互いの氣持はもうはつきりして居る。バルトロメ神父さまのところへ行こう。今夜のうちに結婚させていただくのだ。」
コルテスの軍隊は奥地への進軍を開始した。そして、チョルラの村へ入つたとき、再びアステクの使者が現れた。彼等は、最初のときに倍する金銀寶石を携え、これ以上、奥地への侵入は思いとどまつてほしいと懇願した。が、コルテスの決意は固かつた。黄金塊を眼前に、いまさらひき退れるものではなかつた。
ペドロは大尉に昇進した。そして、アステクから得た財寶を、寺院の一室におさめ、それを護衛する任務を與えられた。或日のこと、ほんの僅かの隙に、寺院の扉の鍵は壞され、財寶を入れた櫃の一つが奪われていた。運の惡いことに、そこへコルテスが入つて來た。
「よろしい。二十四時間の猶豫を與える。その時間内に盗まれたものを取返せなければ、責任上、絞首の刑だ。」
コルテスは厳かに云い放つた。
ペドロは途法にくれて、夜舎のほうへ歸りかけた。そのとき、頭をさすりながらやつてくるポテリヨが眼にうつゝた。
「なに、泥棒じや？いましがた儂をなぐり仆してゆきおつた奴がいたが、それが泥棒にちがいない。人數は二人、ヴィリア・リカの町のほうへ行き居つたよ。」
開くや否や、ペドロは馬をとばして、犯人の跡を追つた。
ヴィリヤ・リカの波止場へ出たペドロの目に夜目にも著く二人の男が、ボオトを漕いで沖へ向つてゆくのがみえた。沖にはコルテスの軍隊をのせて來た十一隻の軍船が、靜かに横たわつていた。ペドロは、傍にあつた土人の丸木舟に飛び乗ると、懸命にボオトの跡を追つた。やがてボオトは一隻の軍船に近づいた。その軍船は、間もなくクウバへ向つて出帆するガリエガ號だつた。ペドロはそつと船室に近づいて、扉に耳をつけた。いまボオトから上つて來た二人の男、クウバ總督ベラスケスの目付役セルメノとエスクデロが、この船の船長コリオにいつていた。
「寶石は盗み損つた。が、コルテスが、手に入れた財寶をクウバ政府には分けず獨り占めしようとしているのは明らかだ。すぐ總督に報告しよう」
これだけ聞けば充分だつた。ペドロは扉から耳を離した。が、そのとき、一人の水夫が彼の姿をみつけた。
「ひと思いに殺つてしまへ。その方が後腐れがないぞ」
エスクデロは、眼の前に引据えられたペドロを憎々しげに睨みながら云つた。
「默れ。貴樣等の惡企みはみんな聞いたぞ。寶石を盗むのに失敗したとは白々しい。船長、奴等は自分たちで横奪りしようとしているのだ。」ペドロのこの一言をきいたコリオ船長のひと睨みに、エス

の的だつたのである。
　ペドロがカルバハル侯の館ちかくまで來たとき、闇のなかから一人の男が現れた。みれば、ファン・ガルシアである。
「お主を見込んでお願いがある。」
　彼は片手に持つた袋を差出して云つた。ガルシアの老母は魔法使と噂をたてられ、異端審問所に捕われた。審問所の所司代デ・ロラ僧正は慾がふかいので八百兩(デュカ)の金貨で買收して、老母をたすけて貰いたい、というのが、ガルシアの願いだつた。ペドロは、金貨の袋をあずかると、審問所へ急いだ。デ・ロラ僧正は、狡猾な笑いをうかべて金貨をうけとつた。が、ペドロが審問所の門を出ようとしたとき、思わずぎくりとなつて立ちすくんだ。デ・サリバが入つて來たのだ。

三、闇夜の逃亡

　スペインの春の夜は、庭にかなでるギタアの音と共に更けて行つた。
「まだおよろしいでは御座いませんの。」
　ドニャ・ルイサは媚びる様な瞳でペドロをみあげながら云つた。
「いや、家で心配いたしますから」
　語らいの席から立ち上つたときドニャ・ルイサの手もとから、縫取した美しいハンケチが、ひらひらと床におちた。ペドロは身を屈めてそれを拾うと、
「ドニャ・ルイサ。これをいたゞけますか？」ときいた。
「えゝ、喜んで。」
　ペドロは、ハンケチに殘された彼女の移り香に酔つた様になつてデ・カルバハル侯の館を出た。
「若様！」
　小聲で呼ぶ聲がした。闇をすかしてみると、それはカタァナとその兄のマヌェルだつた。
「大變でございます。お父様、お母様、お妹さまが、異端審問所へおひかれになりました。いまお歸りになつてはお危うございます。」
「何？さては、デ・サリバの指金だな。」
「まあお待ち下さいまし。いまお歸りになるのは却つて敵の罠におちる様なもの。どこかへ一先ず身をおひそめになつて……」
　マヌェルは、ペドロの袖をとらえて云つた。
「それもそうだ。では、カルバハル侯にお願いして善後策を考えて頂こう。」
　が、カルバハル侯はデ・サリバをおそれていた。相談に乗らぬばかりか、ペドロをかくまうことすら拒絶した。そして、ペドロは、はやくも乗り込んで來たデ・サリバの一味に捕えられ、審問所へ送られた。彼は其處で、妹のメルセデスがデ・サリバの拷問に會つて非業の死をとげたことを知つた。
　その夜半、冷たい地下牢に投げ込まれたペドロの許へ、一人の男が忍び込んで來た。
「ペドロ。儂だ。ガルシアだ。デ・ロラ僧正の奴、裏切り居つた。儂のお袋も殺されたぞ。こうなれば道はひとつだ。さあ、これを。」
　彼は劍と短刀をペドロの手に押しつけた。
「外に馬を用意してあるぞ。」
　ガルシアの姿が消えたあと、また一つの影が忍び寄つて來た。デ・サリバだつた。彼は牢獄の床に横たわつているペドロに近づくや、手にした長劍を、胸元めがけてふりおろした。が、その刃は空しく床を打つた。
「ディエゴ。覺悟はいゝか、妹の仇だ。この刃をうけてみろ。」
「なにを小癪な、返り討にしてくれる。」
　二本の劍のからみ合う音が、陰慘な地下牢にこだました。が、それも束の間、ペドロの恨みの一突きは、ぐさりとデ・サリバの胸を貫いた。ペドロは敵のとゞめを刺す間もなく廊下を走つた。
「ペドロ、殺つたか？上出來だ。急げ！」
　ペドロ、ガルシア、ドン・フランシスコ、ドニャ・マリアを乗せた四頭の馬は、闇夜の街道を、ロサリオ亭へ向けてまつしぐらに走りつゞけた。
　ロサリオ亭には、ソレルとカタァナが待つていた。無事をよろこび合う間もなく、追手たちの馬蹄のひゞきが近づいて來た。
「ソレル、お主はドン・フランシスコとドニャ・マリアのお伴をして海へゆけ、手頃の船で伊太利へわたれ、カタァナ、お前もお伴するのだ。儂とペドロは追手を釣る。その間にうまく逃げてくれ。」
　ガルシアの指揮で、エルナン・ソレルは、殘る愛兒に後髪ひかれる思いのドン・フランシスコ夫妻を促して馬首を海岸へ向けた。追手の叫び聲が、もう間近かにきこえて來る。
「父上、母上、御達者で。」
「うむ無事で會う日を待とうぞ。」
　ペドロとガルシアは丘へ向つて走り出した。が、さらにもうひとつの馬蹄の音がつゞいていた。ふりかえると、カタァナだつた。
「ペドロ様、お連れ下さいまし。死なば貴方様諸共と覺悟のうえ。」
「でかしたぞカタァナ。まことの戀に身を棄てるが、スペイン娘の意地というもの。」
　ファン・ガルシアは大聲にはやしたてたが、ひたひたと追い迫る多數の馬蹄の響に、
「や、來たな。行こう！目指すはエルナン・コルテス様の陣營だ。黄金郷(エル・ドラドオ)でほとぼりをさますのもまた一興じゃろう。」
　一鞭あてゝとみるや、三頭の馬は、三様の思いを抱く三人を鞍にのせ、アンダルシアの闇をぬつてまつしぐら。メキシコ遠征の門途にわき立つサン・ルカルの港、エルナン・コルテスの陣營へ——
「見えたぞウ！」
　マストの頂上の見張が、聲をかぎりに叫んだ。
「うむ。いよいよ着いたな。」
　甲板に立つて、望遠鏡を片手に莞爾と微笑む偉丈夫は、エルナン・コルテスそのひとだつた。その傍らには、サンドバル大尉、アルバラド大尉、クウバの総督ベラスケから目付役として隨遣されたファン・エスクデロ、ディエゴ・セルメノの面々が、同じく喜色の満面にうかべてひかえていた。すこし離れたマストの陰に、萬感を思いをこめて立つはペドロ・デ・バルガスとその友ファン・ガルシア、コルテスの陣營で奇しき邂逅をとげたガルシアの舊友、星占いのせむし男ボテリヤの三人。また人眼立たぬ艫の手摺には、カタァナと神父バルトロメがよりかゝつて、白い砂濱にひしめくアステク土人の群に瞳をころしていた。
　一五一九年の三月、故郷スペイ



★ ★ ★ ★

読者の皆さまえ

日本で最初の總色刷の外国映画のストオリイ紹介ならびに鑑賞專門誌として発足いたしました本誌も発足してやがて一年を迎えようとしております。その間、いろいろな障害のため相つづく発行遲延で読者の皆様には大へん御迷惑をおかけしておりましたが、編集方針も軌道にのり、また今後は定期発行もできる見こみです。

そこでこの際、読者の皆様に本誌についての忌憚のない御意見をいただき、今後の編集方針の參考にしたいと存じます。下記事項につき皆様の遠慮のない率直な御意見をお寄せ下さいますよう。

なお、御投書下さいました方には、御礼として特製スタア・ブロマイドを進呈いたします。

用紙は下記のわくに書込みの上切りぬいても、ハガキにても結構です。東京都澁谷區榮通2ノ6，シネロマンス社宛お送り下さい。

一、シネロマンスのこれまでの編集についての御感想

二、お買もとめの方法（直接購読かまたは書店でお買いになつておりますか）。また定價でお買いになつておりますか？

三、本誌について今後の御希望

御住所

御姓名

編集後記

★前二号つづけざまの発行遲延にはなんとも申しあげる言葉もありません。製版印刷に一般雑誌よりも手がかかるところにもつてきてそれ以外の悪條件がかさなつてそんな有様になつてしまうのですが、毎度遲延のお詫びばかりで編集後記をうづめるのもまことに智恵のないはなしと、酷暑をけとばして奮起一番この号より面目回復をはかりました。うまくゆきましたら、これを機会に定期月刊になるはずであります。そうなると、この後記も愚痴のハケ場所にならなくてすむわけであります。

★本号は材料も豐富となりましたので、紙面の体裁にかなり変化をつけることができました。内容も本文３２ページの中にできるだけ豐富にとりいれました。おかげさまで後記がこちらにハミ出してしまうという盛況であります。本誌独特の読ものもいづれも精選されたものばかりです。飯島氏のフランス映画の記事は次号はひきつづきイギリス映画のことについておもしろく連載されます。新しい鑑賞講座の試みです。また、本号よりシネ・ロマンス・プロフイルを設けました。新進スタアのグリムプスです。

★次号では、アメリカ映画の一つの傾向となつている、ハアド・ボイルド映画のストオリイを中心に新着および新作映画を御紹介したいと考えております。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★

シネ・ロマンス　Cine Romance

第9.10号　特價 25円

購読料（概算）半年１２５円　一年２５０円（送料共）

昭和２２年９月３０日印刷

昭和２２年10月１０日発行

編集兼発行人　東京都澁谷区榮通２ノ6　川上富士子

印刷所　東京都文京区久堅町１０８　共同印刷株式会社

発行所　東京都澁谷区榮通２ノ6　シネ・ロマンス社　電話・澁谷（46）２５０４　振替　東京・196216番

★★★★★★★★★★★★★★★★★★

配給所　日本出版配給株式会社　鉄道弘済会新聞部

☆☆☆　シネ・ロマンス　第11号予告　☆☆☆

新封切のフランス映画をまじえ
６本の新映画の紙上封切！
いよいよ充実の次号に御期待を！



脱出　TO HAVE AND HAVE NOT(W・B映画)　ハンフリイ・ボガート，ロオレン・バコオル主演

旅路の果て　LA FIN DE JOUR（新封切フランス映画）　ジュリアン・デュヴィヴィエ　作品

凡て此の世も天國も　ALL THIS AND HAEVEN TOO(W・B映画)　シャルル・ボアイエ，ベテイ・デヴィス主演

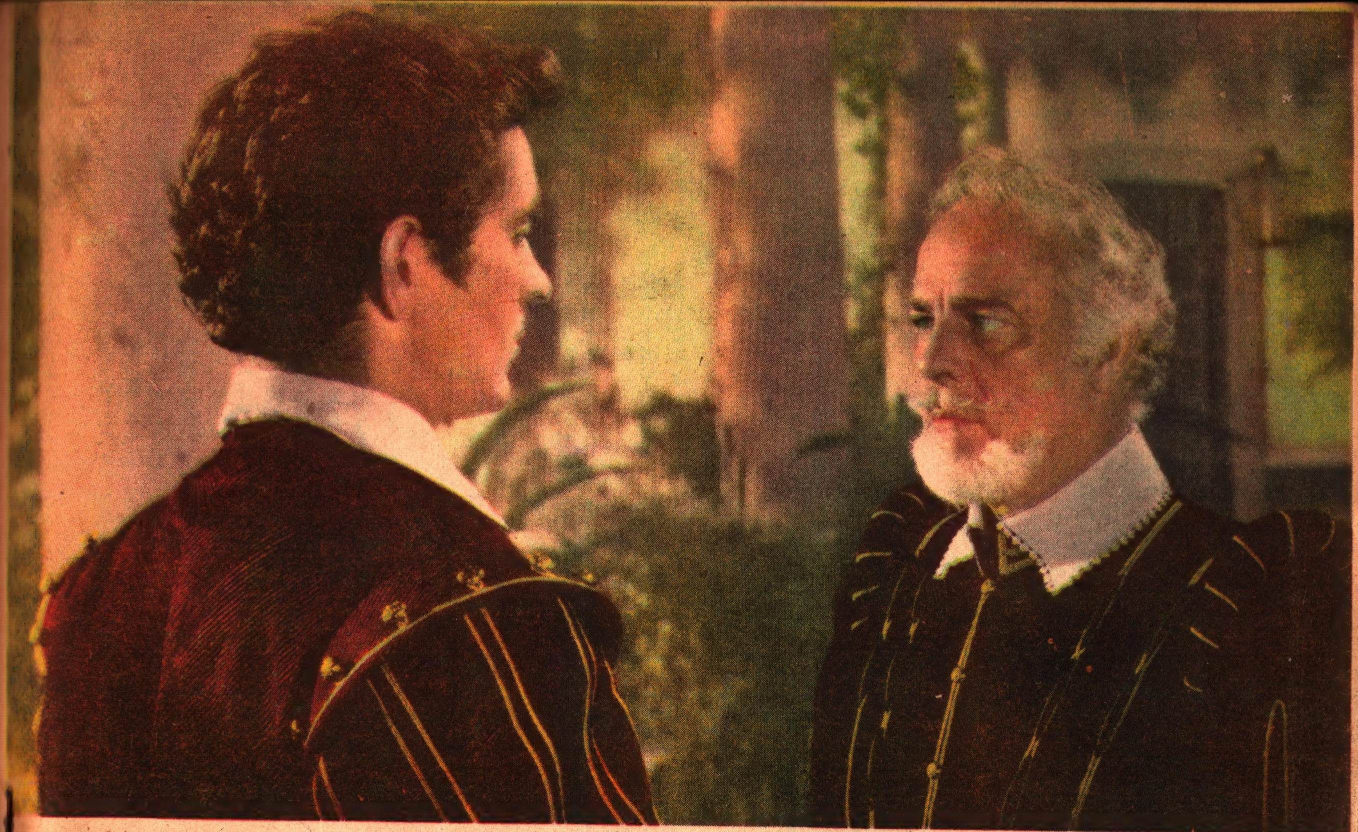
俄か成金　BOOM TOWN (MGM映画)　ゲイブル，コルベエル，トレイシイ。主演

扉の蔭の祕密　SECRET BEYOND THE DOOR(U・I映画)　フリッツ・ラング作品，ジョン・オベネット主演

流謫の王子　THE EXILE (U・I映画)　ダグラス・ジュニア，マリア・モンテス　主演

１１月　上旬　発売

イギリス映画のはなし・飯島　正★男優昔ばなし・南部圭之助



クデロとセルメノは、澁々寶石を差出した。コリオはそれを櫃におさめて鍵をかけると、その鍵を窓から海へ投げすてた。ペドロは鎖につながれて監禁された。
　が、夜半ごろ、コリオ船長はそつとペドロを訪れて、一つの提案をした。若し船をクウバへ出帆させなければ、報酬として幾何もらえるか、というのだつた。ペドロは一千ペソとこたえた。
「手を打とう。」云、ながらコリオ船長は、ポケットから、鍵を出して櫃をあけた。海へ棄てたのは贋の鍵だつたのだ。彼は手早く寶石を身につけると。」ペドロを促して甲板へ上りボオトをおろした。
　が、二、三間はなれたとき、船の上がさわがしくなつた。甲板に並んだ兵士たちの後から一齊に火がほとばしるのが見えた。
　一弾がペドロの肩を貫いた。
「確かりしろ、もうすぐだ！」
　コリオ船長は、がつくりとなつたペドロをはげましながら、必死にボオトを漕ぎつゞけた。

三、黄金の都へ

　具足のふれ合う音、馬蹄の響、兵士たちの叫び聲のうちに、ド、ド、ドつと太鼓のすり打ちがきこえはじめた。
「出發！」
　メキシコの天地に轟くばかりの大音聲。馬上ゆたかに命令を與えるエルナン・コルテスの傍らに、美々しい甲冑に身をかためた一人の若武者が、颯爽と乗りつけた。ペドロ・デ・バルガスである。
　ガリエガ號事件で受けた傷は、ポテリヤの治療で全快した。が、その後、彼にとつては更に多くの試練が待ちうけていた。捕虜となつた五人の土人のうちに、故郷スペインで危いところを救けてやつた土人コアトルが居たこと、増援の軍隊のなかに、殺したと思つた仇敵ディエゴ・デ・サリバの姿を發見したこと。彼の姿にガルシアが再び怒り狂つて逮捕されたこと。故郷からのたよりで、父の名譽が恢復されたよろこびを知つたこと。それに重なるよろこびは、カタアナが愛の結晶を孕つたことだつた。が、その幸福も、デ・サリバ殺害事件で破られた。ペドロは殺人犯としてとらえられ、カタアナは悲嘆のあまり、彼を刺し、自分も自殺を試みたが、コアトルが眞殺人であることを自白したため、辛くも事なきを得た。この間、コルテスは土人軍と闘い、クウバのベラスケス總督から差向けられたコルテス討伐軍をも自己の旗下におさめた。そしてペドロに對する信任の度も日を追つて加えられ、いまや彼にとつてペドロは右腕ともたのむ幕僚となつたのだつた。カタアナもまるまると肥つた赤ん坊を産んだ。いまやペドロ・デ・バルガスの前途は幸福に滿ち溢れていた。そして、この日、いよいよ憧れの黄金の都テノチテトラン（今日のメキシコ市）への出發である。しかも、その第一陣の指揮者はペドロである。
　太鼓の摺り打ちが、ふたゝび高らかに鳴りひゞいた。コルテスに敬禮したペドロ・デ・バルガスは馬首をかえして、整列する兵士たちに向つた。
「出發！」
　みたび太鼓は鳴りひびいた。威風あたりをはらつて先頭にすゝむペドロに従う兵士たちの足並も一糸みだれず歩武堂々、闘わざるうちに土王モンテスマを呑むの慨があつた。そして、兵士たちのあとには、さらに女たちの一群が從つていた。愛する男のために凡てを捧げようとする健氣な女たちである。そのなかにカタアナがいた。彼女はアステク土人の風俗を眞似て、大きなショオルに赤兒を包んで背負つていた。彼女の傍にはバルトロメ神父が付添つていた。黄金の都へ着いたとき、この未知の土地に最初の足跡を印したスペインの赤兒に洗禮を授けるために——。



The Cine Romance Published monthly by The Cine Romance Co. Tokyo, Japan.

育ちゆく年

感謝と希望に溢れて
萌え出ずる
若き時代!!

「王國の鍵」のA・J・クロウニン作
ベストセラーの映画化!!

チャールス・コバーン
トム・ドレーク
ビヴァリイ・タイラー
ヒューム・クロウニン
共演

ヴィクター・サヴィル監督

メトロ・ゴールドウィン・メーヤー映画



シネ・ロマンス（第二巻第九・十号）
昭和二十二年九月三十日印刷納本・昭和二十二年十月十日発行　特価二十五円（送料[illegible]）
Printed by Kyodo Printing Co. Ltd. Tokyo. Japan.